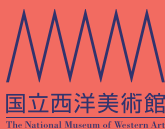


2016年度—2019年度

国立西洋美術館
ボランティア
活動報告

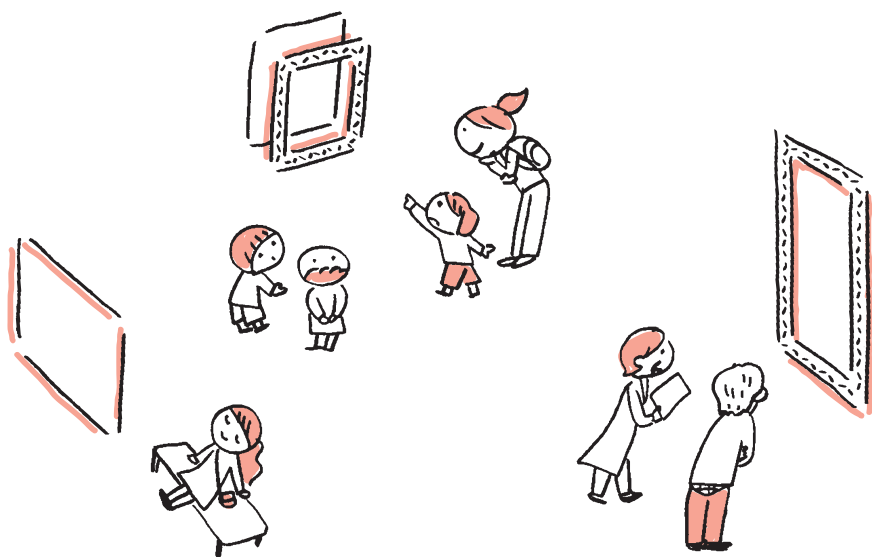


The National Museum of Western Art

Volunteer Activity Report 2016-2019



国立西洋美術館
ボランティア活動報告
2016年度 - 2019年度



| | |
|------------------------------------|----|
| ごあいさつ | 03 |
| 国立西洋美術館ボランティア 2016年度～2019年度までの活動概要 | 04 |
| ボランティア・スタッフについて | 06 |
| スクール・ギャラリートーク | 09 |
| ファミリープログラム どうぶじゅつ | 21 |
| 美術トーク | 41 |
| 建築ツアー | 49 |
| その他のプログラム | 57 |
| 美術館でクリスマス | 58 |
| 研修 | 59 |
| 2016年度 四期ボランティア・スタッフ養成研修 | 60 |
| 2019年度 五期ボランティア・スタッフ養成研修 | 63 |
| 公式研修 | 66 |
| 自主的な活動 | 67 |
| 自主研修 | 68 |
| 図書委員、PDF委員 | 69 |
| ボランティアート | 70 |
| 金曜ナイトトーク | 74 |
| ボランティア・スタッフ卒業生の声 | 76 |
| ボランティア・スタッフ名簿 | 80 |
| 教育普及室スタッフ名簿 | 82 |
| 編集を終えて | 83 |

本書は、2016年度～2019年度の国立西洋美術館ボランティア活動の記録です。

2016年度から2019年度の4年間で、当館ボランティア・スタッフのメンバーは大きく入れ替わりました。本制度はボランティアを通じての学びの場であることも目的としており、2008年度以降10年、2013年度以降は6年の任期を設け、定期的に募集を行うことで、その機会を広く提供しよう努めています。2017年度には一期が、18年度には二期が、19年度には三期が任期を終了しました。一方、2016年度には四期、2019年度には五期の募集を行い、新たなメンバーが加わりました。

ボランティア・スタッフが当館の教育活動に加わることで、学校や家族をはじめ、より多くの方々に向けて、当館の所蔵作品に親しみ、美術館での体験を深めるプログラムを提供し続けてきました。更に、ボランティア・スタッフの発案により、新たなプログラムを始めるなど、その活動は広がりを見せています。当館の教育活動の担い手であり、所蔵品活用、そして学びの場としての美術館の可能性を大きく広げてくれる存在です。この場を借りて、ボランティア・スタッフの皆様の貢献に心よりお礼申し上げます。

この4年間で、当館を取り巻く環境においても大きな出来事がありました。2016年7月には、フランスの建築家ル・コルビュジエが設計した17資産の一つとして、当館の本館と前庭がユネスコの世界遺産一覧表に記載されました。来館者の建物への関心もさらに高まり、ボランティア・スタッフによって行われている建築ツアーの参加者増加にもつながりました。もう一つ、当館だけではなく美術館、博物館全体に大きな衝撃を与えたのが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大です。当館においても、2020年2月25日以降、全プログラムを中止せざるを得ない状況となりました。そのまま、2020年10月から2022年春(予定)にかけて、館内施設整備のための全館休館となり、これまでの様なボランティア活動ができない状態が続いています。

当館が再開する2022年に美術館が置かれる状況がどうなっているかは未だに不透明です。ボランティアの活動においても、おそらくやり方を変えていかなければならない場面もあるでしょう。一方で各プログラムの本質は残っていくことと思われます。新たな局面を迎えるにあたり、本書、及び過去の報告書に収められたこれまでの蓄積が大きな力になっていくと確信しています。一日も早く、多くの方に安心して美術館にお越しいただける日が戻ることを切に願い、こう言う時だからこそ、美術館と来館者の架け橋として、ボランティアの皆様の益々の活躍に期待いたします。

2021年6月

「美術館と来館者の架け橋となるボランティア・スタッフの募集」で2004年度から始まった当館のボランティア活動は2019年度で15年目を迎えました。開始当初は20名ほどのボランティア・スタッフとともに始めた活動は、スタッフの人数が増え、幅広い来館者へ向けた教育プログラムの実施が可能になりました。主に、学校団体向けのスクール・ギャラリートーク、子どもとその家族を対象としたファミリープログラム「どようびじゅつ」、大人を対象とした美術トーク、10歳以上を対象とした建築ツアーです。スクール・ギャラリートークは盲学校をはじめ、特別支援学校の参加も定着してきました。「どようびじゅつ」は申込受付からすぐに定員になるほどの人気プログラムです。美術トークはトーク回数を増やしたこともあり、参加者やリピーターが増えてきました。建築ツアーは2016年7月に当館の本館と前庭が世界遺産一覧表に記載されたことをきっかけに来館者の関心が高まり、ツアー回数を増やし、オンラインでの申込システムを導入しました。このような活動の積み重ねにより、来館者が美術館で所蔵作品や建築を楽しむプログラムが周知されてきました。

長年にわたり、継続したプログラムを行うことができるようになったのは、ボランティア・スタッフの大きな支えがあったからです。スタッフはプログラムごとの担当に分かれて活動していますが、プログラム当日以外の時も、事前の準備から終了後の話し合い、扱う作品についてのリサーチや自主学習など、プログラムの実施に向けて努力を惜しみません。さらに、規定のプログラムの枠を超えた自主的な活動も継続して行っています。スタッフ自身で学びたいことを企画して実践する自主研修、ボランティア室の図書資料を管理する図書委員の活動、夏休みとクリスマスの時期に行う立ち寄り制プログラム「ボランティアート」、スタッフの提案で2016年度より始まった金曜日の夜に常設展で行う金曜ナイトトークです。

また、2016～2019年度の間に、一期から五期まで総勢101名のボランティア・スタッフが当館の教育プログラムに携わりました。その間、一期から三期スタッフの任期が終了し、四期、五期スタッフが活動に加わり、多くのスタッフが入れ替わった時期でもありました。参加のきっかけはそれぞれ異なるかもしれませんが、美術館スタッフとプログラムの目的や意味を共有し、話し合いながら、それぞれの得意分野を活かして活動を継続してきました。

2019年度末には、コロナ禍の影響により、全プログラムの中止を余儀なくされました。活動が制限される状況が続いていますが、これまでの活動の火を絶やさぬように、ボランティア・スタッフとともに、今後も継続して来館者が美術館を楽しめるプログラムを提供できるよう、取り組んで参りたいと思います。



ボランティア・スタッフについて

■ 国立西洋美術館のボランティア・スタッフとは

美術館と来館者の架け橋となる存在です。美術館が主催する教育プログラムにて、その目的を共有し、担い手となって活躍しています。様々なプログラムの継続的な実施に大きく貢献しています。

活動内容は？

ボランティア・スタッフによる活動は、主に下記3つの担当グループに分かれて行っています。(一期、二期については兼任あり)

担当A:

スクール・ギャラリートーク (学校団体を対象とした所蔵作品のギャラリートーク) ファミリープログラム「どうびじゅつ」

活動開始時期：スクール・ギャラリートーク…2005年度～
ファミリープログラム「どうびじゅつ」…2004年度～
人数：25名(2016年度) ※担当Bとの兼任あり
41名(2017年度) ※担当Bとの兼任あり
31名(2018年度) ※担当Bとの兼任あり
25名(2019年度)

担当B:

美術トーク (主に大人を対象とした所蔵作品のギャラリートーク)

活動開始時期：2009年度～
人数：14名(2016年度) ※担当Aとの兼任あり
26名(2017年度) ※担当Aとの兼任あり
20名(2018年度) ※担当Aとの兼任あり
12名(2019年度)

担当C:

建築ツアー (10歳以上を対象とした本館・前庭に関する建築の解説ツアー)

活動開始時期：2009年度～
人数：10名(2016年度) ※担当Aとの兼任あり
19名(2017年度) ※担当Aとの兼任あり
16名(2018年度)
13名(2019年度)

活動の任期は？

| 年度 | 一期 | 二期 | 三期 | 四期 | 五期 |
|------|----|----|----|-----|-----|
| 2004 | 研修 | | | | |
| 2005 | | | | | |
| 2006 | | | | | |
| 2007 | | | | | |
| 2008 | | 研修 | | | |
| 2009 | | | | | |
| 2010 | | | | | |
| 2011 | | | | | |
| 2012 | | | | | |
| 2013 | | | 研修 | | |
| 2014 | | | | | |
| 2015 | | | | | |
| 2016 | | | | 研修 | |
| 2017 | | | | | |
| 2018 | | | | | |
| 2019 | | | | | 研修 |
| 2020 | | | | | |
| 2021 | | | | ※休館 | ※休館 |
| 2022 | | | | | |
| 2023 | | | | | |
| 2024 | | | | | |
| 2025 | | | | | |
| 2026 | | | | | |
| 2027 | | | | | |

※館内施設整備のため2020年10月19日～2022年春(予定)は休館

一期ボランティア・スタッフ

研修期間：2004年6月～2004年10月
活動期間：2004年11月～2018年3月末(14年間)

二期ボランティア・スタッフ

研修期間：2008年11月～2009年3月
活動期間：2009年4月～2019年3月末(10年間)

三期ボランティア・スタッフ

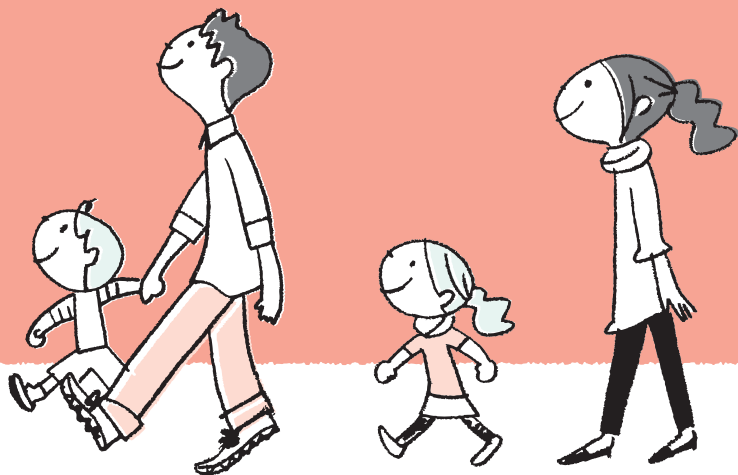
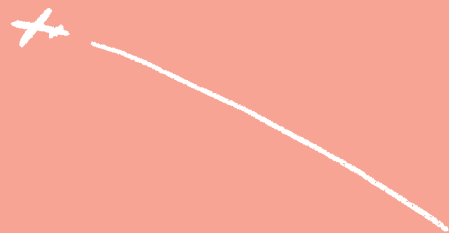
研修期間：2013年7月～2014年3月
活動期間：2014年4月～2020年3月末(6年間)

四期ボランティア・スタッフ

研修期間：2016年6月～2017年3月
活動期間：2017年4月～2024年3月末予定(長期休館を除く6年間)

五期ボランティア・スタッフ

研修期間：2019年6月～2020年2月
活動期間：2020年4月～2027年3月末予定(長期休館を除く6年間)



主に学校の団体で来館する子どもたちを対象とした、所蔵作品のギャラリートークです。2005年度から継続して行われています。

作品をよく見て、感じたこと考えたことを自分の言葉で表現することを促す対話形式のトークです。子どもたち一人一人の思いを発言を大切にするために、10名以下の少人数のグループに分かれ、ボランティア・スタッフとともに作品を鑑賞します。ボランティア・スタッフは、子どもたちの主体性を尊重し、「作品をじっくり見る」手助けをします。常設展示の中から、時代、主題、表現の異なる絵画2点と彫刻1点の計3点の作品を中心に鑑賞します。

実施日 | 火～金曜日の10:00～17:30 通年、休館日・祝日を除く
所要時間 | 約45分間(集合、挨拶などを含めると約1時間)
参加方法 | 事前申込制
定員 | 各回5名以上60名以下

トークのコースを一部紹介!

ジャンルの異なる様々な作品を子どもが楽しめるよう、また、見る作品が複数のグループで重ならないよう作品を組み合わせ、約10コースを設けています。



Aコース

- ① オーギュスト・ロダン《カレーの市民》
1884-88年(原型)、1953年(鑄造)
- ② マリオット・ディ・ナルド《「聖ステパノ伝」を表した祭壇画ブレデッラ》1408年
- ③ ポール・シニャック《サン＝トロベの港》1901-02年



Bコース

- ① オーギュスト・ロダン《地獄の門》
1880-90年頃/1917年(原型)、1930-33年(鑄造)
- ② ダフィット・テニールス(子)《聖アントニウスの誘惑》
- ③ ジョアン・ミロ《絵画》1953年



Cコース

- ① ヤーコブ・ヨルダース(に帰属)《ソドムを去るロトとその家族(ルーベンスの構図に基づく)》
1618-20年頃
- ② クロード・モネ《睡蓮》1916年
- ③ オーギュスト・ロダン《オルフェウス》1908年(原型)、1921年(鑄造)

※見る作品は展示替えによって変わります。また、目的や滞在時間、参加者の年齢にも配慮して、扱う作品を決定します。

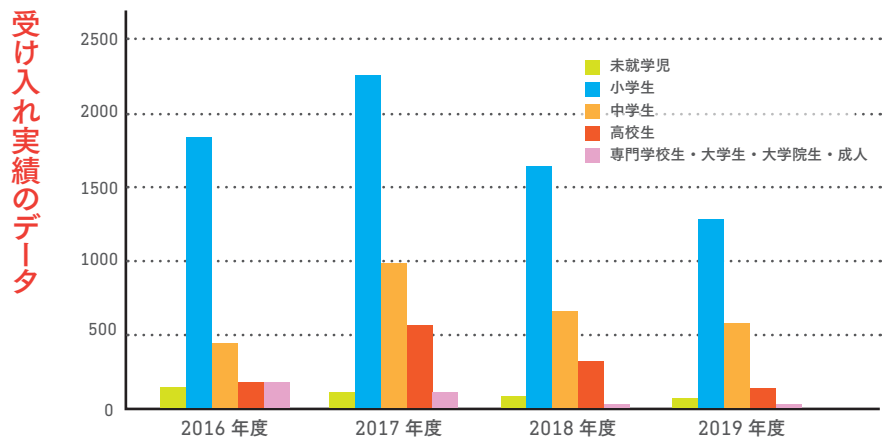


2016年度以降の傾向

参加者の種別を見ると、最も多いのが小学生、続いて、中学生、高校生となっています。また、近年では毎年、未就学児や特別支援学校の児童・生徒、生涯学習の団体も参加しています。初参加の学校から毎年参加する学校もあります。

参加の目的は、図工や美術の鑑賞教育の一環、世界史の授業、修学旅行や社会科見学、美術部の活動など、多岐にわたります。基本的には3作品で45分間のトークを行います。事前に学校からの要望やスケジュールの相談があった場合は、作品数を調整したり、作品を入れ替えたり、授業や学校行事の目的にできる限り合わせるよう努めています。担当のボランティア・スタッフはそれらのことを踏まえ、多様なニーズに対応しています。

2019年度の回数と参加者数が減っているのは、展示替えによる休館の期間があったことや新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のためにプログラムを中止せざるを得なかったことが影響しています。



2016年度 参加者数：2,793名(83件)
未就学児：148名(2件)、小学生：1,834名(40件)、中学生：471名(22件)、高校生：182名(12件)うち、特別支援学校：63名(3件)、フリースクール：15名(1件)、専門学校生・大学生・大学院生・成人：178名(8件)

2017年度 参加者数：4,034(103件)
未就学児：123名(4件)、小学生：2,265名(46件)、中学生：981名(31件)、高校生：544名(16件)うち、特別支援学校：36名(1件)、フリースクール：0名(0件)、専門学校生・大学生・大学院生・成人：121名(6件)

2018年度 参加者数：2,711名(90件)
未就学児：91名(4件)、小学生：1,625名(38件)、中学生：681名(34件)、高校生：303名(13件)うち、特別支援学校：58名(3件)、フリースクール：0名(0件)、専門学校生・大学生・大学院生・成人：11名(1件)

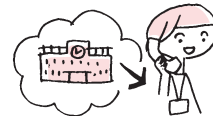
2019年度 参加者数：2,085名(61件)
未就学児：77名(4件)、小学生：1,291名(27件)、中学生：541名(22件)、高校生：137名(6件)うち、特別支援学校：56名(3件)、フリースクール：4名(1件)、専門学校生・大学生・大学院生・成人：39名(2件)

※新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため2020年2月25日～3月31日全プログラム中止

実施までの流れ

1 申込

学校から美術館へ申込の電話があり、来館日時などを調整します。参加者数やグループ数に応じて、必要なボランティア・スタッフの人数を教育普及室が決めます。



2 担当者の募集

来館日の1ヶ月前にボランティア・スタッフへトーク担当者を募集するメールを送り、担当者を募ります。担当可能なボランティア・スタッフは、1週間以内に予定調整サイトへトーク可能な日を入力します。



3 担当者と作品の決定

教育普及室が当日の担当者及びトークする作品を決め、さらに担当者の中からリーダーを1名指名して、ボランティア・スタッフに連絡します。各担当者は当日までにトークプランを考えます。リーダーは当日の打ち合わせ、全体の挨拶、反省会の進行を務めます。



4 最終確認

トークの数日前、リーダーは当日の集合時間や全体の流れなどを他の担当者にメールで送ります。



5 事前打ち合わせ

当日はボランティア室で簡単な打ち合わせを行い、参加者の到着を待ちます。



6 参加者の受付

参加者が到着したら、リーダーを中心に先生(または参加者代表)とスケジュールなどの確認を行います。チケットの受け取り、雨天時の傘入れの手配、ロビーやトイレへの誘導などを皆で協力して行います。その後、全体で挨拶し、グループごとに分かれてトークを開始します。



7 トーク開始

グループで鑑賞する時間は約45分。館内でのルールを伝え、3作品をじっくり鑑賞していきます。



8 ふりかえり

トークが終わったら当日の担当者全員で、それぞれのトーク内容や当日の参加者の様子を振り返り、次のトークに活かします。リーダーはその内容を共有ノートに記録します。



わたしのおすすめ作品

自分にとっての当館所蔵作品の見どころや魅力について、スクール・ギャラリートークを担当する四期ボランティア・スタッフ、五期ボランティア候補生へ尋ねてみました。

四期ボランティア・スタッフへの質問！

「3年間の活動を経た今、あなたのおすすめ作品は？」

五期ボランティア候補生への質問！

「2019年度の養成研修を終えた今、参加者と一緒に見たい作品は？」

ピーテル・ブリューゲル(子)
《鳥罾のある冬景色》
油彩、板 旧松方コレクション



賑やかな声が聞こえたので窓を開けてみた。凍結した川でホッケーやスケートをする人たちに混じってコマ遊びする人が目に飛び込んできた。楽しそう。よく見ると氷に大きな穴発見！枝に止まっている鳥や高い木の下に小鳥たちが集まって、餌でもたべてるのかな？あれ、罾かもしれない。危険な要素も見え隠れ、日常の脆さやスリルを感じる冬の風景画。想像の膨らむ好きな作品です。(M.S.)

どんよりとした冬空とは対照的な賑やかな子どもたちの姿に、自らもその誰かになり、冷たい空気が心地よく感じるほど湧き上がるワクワクした気持ちを誰かに伝えたいという衝動にかられる作品です。フランドルの農村ならではの冬の楽しみをうかがえるだけでなく、そこに潜む危険や鳥罾などの生活感にハッとします。鑑賞する子どもたちが自ら主人公となる時、どんな言葉が聞こえてくるか楽しみな作品です。(A.E.)

ヤーコプ・ヨルダーンス(に帰属)
《ゾドムを去るロトとその家族
(ルーベンスの構図に基づく)》
1618-20年頃 油彩、カンヴァス



「あっ、こっちの人にも翼がある！」「右の人の頬にも涙が！」「2人の天使に連れられて家族が逃げて行くところだと思う」「でも行きたくなさそう」旧約聖書が主題の作品を小学生とどう鑑賞したら良いか…そんな不安はすぐに払拭。表情、仕草、持ち物、背景など気付いたことを話してもらっているうちに、皆がどンドン絵の世界に入っていく。絵の力と子どもたちの力を実感できる作品だ。(N.K.)

鮮やかな色彩で画面いっぱいに描かれた人物の存在感が際立つ作品です。人物の表情と動きから内面やその置かれた状況が様々な想像されます。不穏な雰囲気の下、人間たちを促して進もうとする天使とそれに逆らうように振り向く黒衣の男、涙を拭う女。緊迫感漂う絵の中で何が起っているのか、惹きつけられます。じっくり見ていると旧約聖書の物語の世界が生き生きと動き出すようです。(H.K.)

ダフィット・テニールス (子)
《聖アントニウスの誘惑》
油彩、カンヴァス



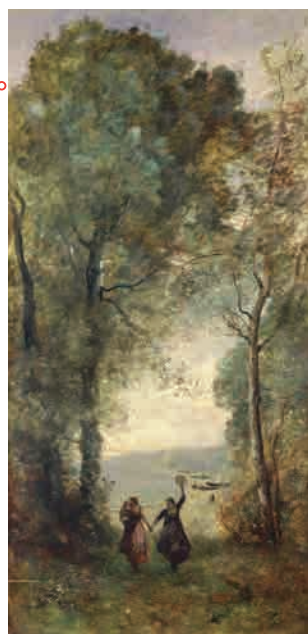
“一緒に遊びましょう”ここ、ここ、白い服を着て、グラスを持っている「私」はおじいさんを誘っています。骸骨の獣に乗った者や、空を飛んで、蛙のようなのを乗せている者もいるでしょ。『ヘンテコ』な生き物がいっぱいなの。ゲームの中のような、怪しい世界の少し不気味で可愛い者たちの仲間になりませんか？さて！ここでクイズです。「私」は人間でしょうか？何者でしょうか？ヒントは・・・「私」の足を見てね。(S.S.)

エドゥアール・マネ
《ブラン氏の肖像》
1879年頃 油彩、カンヴァス
松方幸次郎氏御遺族より寄贈
(旧松方コレクション)



思わず立ち止まってしまうのは何故だろう。シルクハットを被り、きちんとした身なりの紳士が威風堂々と決めポーズで立っている。何やら不機嫌そうな表情で独り言でもつぶやいているのだろうか。寸胴でぼっちゃり太めな体型は親しみやすく愛らしい。今ではあまり見かけない昭和の頑固親父を思い出す。どこか懐かしい近所の馴染みのおじさんは、まさに西美のフーテンの虎さん！ブラン氏だ。(F.H.)

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《ナポリの浜の思い出》
1870-72年 油彩、カンヴァス



銀灰色の淡いヴェールに覆われた本作を見ていると、コローの優しい昔語りが増えてくるようだ。背の高い樹木が形作るアーチに囲まれた小道を、躍るような足取りで登ってくる二人の女性にはどんな物語があるのだろう。高く掲げたタンバリン、腕に抱く幼児。彼女たちの暮らしを彩るささやかな喜びを見守るコローのまなざしを感じながら、明るく霞むナポリ湾を遠望している自分に気づく。(K.M.)



部屋に入ると飛び込んでくる明るい色彩、一見強面の紳士が佇んでいる。近づくとう品なスーツを着こなし、胸元の花、整えられた髭がお洒落で繊細なセンスの持主だということを示している。背景は素早いタッチ、透明感のある色彩で描かれ草木や小石の輝き、夏の薫りまで感じさせてくれる。観れば観るほど人物の個性、背景の空気まで読み解くことができる作品なので皆様にもおすすめします。(M.Y.)



ブラン氏はイケメンでもカッコよくもないおじさまだけど、なぜか気になる。大好きな画家マネが描いたから、なおさらだ。彼は一体ナニモノ？小粋なパリジャン？あるいはやり手の実業家？はたまた天才マジシャン？絵の前を通るたび、ボンジュールと声をかけるけど、いつもそっぽをむいてしらんぷり。つれないブラン氏。だから、ますます気になって・・・スキになってしまいました。(I.S.)



まずは遠くから見て・・・淡く柔らかい色調、補色の組み合わせが美しく、光に溢れている。次に近寄って見てモザイク状の点描の繊細さ、緻密さに驚き、それを踏まえて再び遠くから見る。すると新たに・・・色彩だけでなく微妙なタッチの変化による美しさを発見し、感動する。暖かい太陽から注がれる優しい光、穏やかにきらめく海、そこで生活する人々・・・全てが美しく調和している。(A.N.)

ポール・シニャック
《サン＝トロペの港》
1901-02年 油彩、カンヴァス



これ程会話を引き出す絵は、珍しいのではないのでしょうか。畳一枚くらいの大きなカンヴァスを、子どもたちと床にべタンと座り眺めます。口数の少ない子も、目で隅々まで絵を追っているのが分かります。何度もまばたきをしながら、見ていた子もいます。はつきりと、「世界が広がった気がする」と教えてくれた子もいました。誰かに何かをつぶやきたくなる、それがこの絵の魅力だと思います。(K.C.)



この作品は研修時には新館1Fに降りてすぐの細長い部屋の一番奥の壁に飾られていました。比較的大きく、色彩の美しさからもとても目を引く作品です。その点描の絵は歩を進めて近づくにつれ表情を変えていきます。子どもたちとその異国情緒溢れた港町の生活感、時間の一部を切り取ったかのような空や水面の移ろいを語り合えたらと今からワクワクして待っております。(I.M.)



桜色に染まっていく空の輝きに目を奪われる作品です。様々な色彩と筆触を見ることに楽しさがあります。全景は漁師や帆船などが描かれた20世紀の港の風景ですが、手前の薄暗い港の光景の青と対岸の街並みのオレンジで、コントラストが強調され、港が陽光に染まっていく様子を色彩のグラデーションで表現していることに驚かされます。帆船の旗や城郭のある丘にも注目です。(S.Y.)



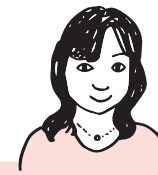
この作品は、季節の移ろいを感じる、柔らかな外光が入る空間に展示されています。光が生まだすオルフェウスの表情と、力強さを感じる身体の陰影から、絶望するオルフェウスの叫びが聞こえてくるような、圧倒的な迫力を感じる作品です。スクール・ギャラリートークで生徒の皆さんが作品の周りをまわり、自分が観たい場所を見つけて鑑賞できることも魅力の一つです。(K.M.)



オーギュスト・ロダン
《オルフェウス》
1908年(原型)、1921年(鑄造) ブロンズ
松方コレクション



作品のポーズと顔の表情から人物像と場面を想像する面白さがあります。子どもたちは同じポーズをとり、作品になりきって盛り上がります。「重いものを持って転んだ?」「上を向いて希望を求めている?」「でも、顔は苦しそうな表情だから助けてと言ってる?」ギリシア神話のオルフェウスの物語を紹介した後、改めて感想を聞くと、オルフェウスの心情に思いを寄せて作品を深く鑑賞しています。(N.K.)



ロダンの彫刻には感情のほとばしりがある。一瞬の切り取りから伝わる感情は雄弁だ。ポーズを真似した子どもたちは、神に懇願している、悔しくて叫んでいる等、片手を突き上げる姿勢や、緊張感の漲る筋肉、天を仰ぐ表情に目を凝らして、想像を巡らす。手の跡を見出し、自分も粘土で像を作りたいと訴えてくれる児童もいた。彫刻の感情がこちらにまで響いてくるのを共有できる作品である。(Y.S.)



ヴィルヘルム・ハンマースホイ
《ピアノを弾く妻イダのいる室内》
1910年 油彩、カンヴァス



妻がいる自宅を描いているのに、まるで生活感がない。穏やかだけど、何だか不安になるような不思議な作品。グレーを中心とした落ち着いたトーンで大人に向いているかと思いきや、大人も子どもも区別なく、語り合うような鑑賞ができたのが印象的でした。弾いている曲、窓の外の様子、室内にいる誰かの足音…描かれていない部分を想像させる、独特な空気感が漂うところに心惹かれます。(K.R.)



新館1Fにある一際大きな絵です。全体的に茶色がかっていますが、絵の前に立ってじっくり見ているといろいろな形が複雑に組み合わさって描かれている様子が見えてきます。全部見つけられなくても心配りません。「あれは何をしているところかな?」「ここはどんな場所だと思う?」と問いかけを繰り返すことで、段々と絵の中に入っていく楽しみを味わえます。(K.E.)



アルベール・グレーズ
《収穫物の脱穀》
1912年 油彩、カンヴァス



ジョアン・ミロ
《絵画》
1953年 油彩、カンヴァス 山村家より寄贈



明るいグレーの大きな画面は、光を受けて輝いているよう。そこに赤い大きな円と小さな黒と青い円、黒い星型が浮かび、動きのある黒い曲線は何かの軌道か。太陽のようにも見える赤い球体からのエネルギーに引き寄せられ、自分もこの天空を浮遊しているような、開放的な気持ちになれるところが好きだ。《絵画》というタイトルが、見る人の自由な想像を広げてくれるところも魅力である。(S.K.)

© Successió Miró / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021 E4032

スクール・ギャラリートークのコースが決まると担当作品をじっくり鑑賞するところから準備が始まります。会話を通じての「気づき」の糸口は作品そのものにあります。鑑賞しながら子どもとの会話を想像し、トークの骨子を組み立てます。当日は子どもたちの感受性や想像力が豊かで予定通りにはなりません。「これぞ醍醐味!」私も一緒に発見を楽しませてもらいます。お陰で好きな作品が増えました。(M.Y.)



その日も最初は発言がまばらでした。《舟遊び》の前でその男の子が話しました。一生懸命それとても素直に話るので他の子たちも話しました。どの子もまっさら絵を観始めました。女の子がそっと教えてくれました。「あの子ふだんはあんなにしゃべらないんです。びっくりした。」って。子どもたちがふとしたことで作品に夢中になる瞬間にかかわれる!スクール・ギャラリートークの活動の醍醐味です。(N.K.)

大人は自分の意思で美術館を訪れます。子どもは連れて来られます。その子たちに、興味も持てない作品を見せて、何らかの言葉を引っぱり出さなければならない対話鑑賞は、時にどちらにとっても苦行となります。そんな試練を経て、子どもたちへの対話鑑賞を続けたいと思う気持ちは何なのでしょう? 6年間、「楽しかった!」としか思えないのは何故なのでしょうか?(N.S.)



スクール・ギャラリートークのコースと作品が決まると、トークプランをたてて必ず作品の前で流れを思い巡らします。でも、本番では最初の問いかけをしたところから子どもたちの反応によって、いろんな方向に広がっていくのが大方です。つぶやきや子ども同士のやりとりが始まったらしめたものですが、そうまくはいきません。心がけているのは、子どもの言葉をゆっくり待つ姿勢です。そして、一緒に楽しむことです。(S.E.)

一期一会のトークの時間はそれぞれ印象深いものでしたが、特に、言葉での表現が苦手な子どもたちがジェスチャーや紙に絵を描くなどして、自分の思いや気づきを懸命に伝えてくれたときには心が震えました。多様な参加者がより一層美術館を楽しめるよう、ニーズに沿った具体的なサポート手段をもっと工夫できたのではないかなと、少し心残りです。(S.I.)

参加者の声

★児童・生徒の声

小学生

あまり絵などにきょうみはなかったけど、みているうちに、もっといろんな絵をみたいなと思いました。



友達の意見を聞いて、こんな考えもあるんだなぁと思いました。

一つの絵に喜びや悲しみ、くらしみがかくされていて、それを考えるのが、たのしかったです。



中学生

一人で見るよりもたくさんの人と意見を共有した方が作品に関心が深まり、視野が広まることができました。



作品をじっくりと見て想像するおもしろさを知ることができ、世界が広がりました。



鑑賞して思ったことをみんなに話したり、みんなが思ったことを聞いたりするなど、話し合うことが楽しかったです。

★先生の声

年長さんを数名のグループに分けて、毎夏参加させて頂いています。フィルターのかかっていない子どもの視点での発言にはいつも驚かされます。モネやロダンが生きていたらきっと大喜びしたと思います。影響を受けるのか、その後の子どもたちは自信たっぷりです。(幼稚園の先生)



毎年5年生が参加しています。見て感じたことを友達と自由に話し合うことで新たな見方・考え方が生まれます。その経験をもとに、学校の展覧会では、6年生が進行役になって他の学年・保護者・地域の方を参加者にしてギャラリートークを行っています。深まる、広がる活動です。(小学校の先生)

スクール・ギャラリートークをしていただくことで、マナーはもちろんですが、作品の前で感想を話したり、作品の格好をしてみたりと、美術館とは静かに作品を見るだけの所ではなく、生徒のもっている色々な考えをボランティアさんに引き出してもらえる機会だと感じます。(中学校の先生)



授業で美術選択を行った生徒たちが多いグループで参加しました。ボランティア・スタッフの方が幾つかの作品を丁寧に解説してくださいました。また、生徒の感想にも応えて下さり、互いに様々な視点を持ちながら作品鑑賞することの楽しさを教えていただきました。(高校の先生)

6～9歳の子どもと同伴の大人を対象とした、常設展の作品を家族と一緒に楽しむ2時間のプログラムです。ボランティア制度を導入した2004年度から継続して行われています。作品鑑賞と創作などの体験型の活動がセットになっているのが特徴です。ボランティア・スタッフの進行のもと、展示室で簡単なアクティビティを取り入れて絵や彫刻を見たり、大人も子どもも一緒になって創作したりと、所蔵作品との関わりを深めながら、家族や参加者同士のコミュニケーションを促し、一緒に楽しめる内容を心がけています。

スクール・ギャラリートーク担当のボランティア・スタッフ全員がこのプログラムに関わります。スタッフは春担当と秋担当の2つのグループに分かれ、春と秋でそれぞれ異なるプログラムを実施します。

プログラムの内容は、ボランティア・スタッフから有志の企画担当者を募って教育普及室スタッフとともに考えてきました。

実施時期 | 春期(3～5月)と秋期(9～11月)の第1・3土曜日

時間 | 午前(10:00～12:00) / 午後(14:00～16:00)

参加方法 | 事前申込制(先着順)

定員 | 各回15名(大人含む)

ファミリープログラム どようびどようび



■ 2016年度以降の傾向

申込受付を開始すると数日で全ての回が定員になることもあり、こうした年齢層の子どもと家族で参加できるプログラムへの需要の高さがうかがえます。リピーターも多く、兄、姉が対象年齢を過ぎた後は弟、妹が参加したりと、長い期間参加する家族もいます。

近年では、子どもと参加する家族の形態も様々で、母親や父親との参加、両親との参加に加え、祖父母や親戚との参加が見られます。また、2016～2019年度までの参加者数の内訳は、子どもと大人で約半数ずつとなっています。

| 日程 | プログラム名 |
|------------|-------------------|
| 2016年 春期 | あかるいところ くらいところ |
| 2016年 秋期 | セイビのたてももの再発見！2016 |
| 2017年 春期 | わくわく☆わ〜く!! |
| 2017年 秋期 | コネコネ・ペタン！ねんどで遊ぼう！ |
| 2018年 春期 | ホントはにぎやか？びじゅつかん！ |
| 2018年 秋期 | らぶ♡らぶフロッタージュ |
| 2019年 春期 | ボン・ボヤージュ！ |
| 2019年 秋期 | ココロでコラージュ |



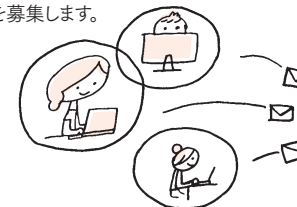
★企画担当ボランティア・スタッフの役割★

企画担当のボランティア・スタッフは、教育普及室スタッフとともにプログラム内容を考え、企画を練る段階から関わります。テーマやプログラム名、鑑賞作品や創作活動に至るまで、内容の全てを検討します。そのため、打ち合わせや準備作業で集まる回数が10回を超えることもあります。

また、プログラム本番の1～4週間前には、企画担当が他のボランティア・スタッフとトライアルを行います。トライアルは、企画担当の進行のもと、ボランティア・スタッフが参加者になったつもりで体験し、プログラムの改善点などを話し合って最終調整を行う場です。プログラムを作り上げるうえで「参加者の視点」で検証する大切なプロセスでもあります。このトライアルを通して、皆で内容や手順を確認し、約3ヶ月にわたるプログラムに臨みます。

1 企画担当者の募集

各プログラムが始まる約3ヶ月前に、教育普及室がボランティア・スタッフから企画担当者を募集します。



2 内容の検討

立候補した企画担当者とともに、プログラムの内容を検討します。



3 シフト作成

企画担当者は内容を決めるほか、他のボランティア・スタッフのシフト作成も行います。



4 トライアル

プログラムが始まる約1ヶ月前に「トライアル」を実施。担当者全員で内容を協議のうえ共有し、最終調整をします。



5 事前打ち合わせ

プログラム当日は事前に簡単な打ち合わせを行い、担当者と教育普及室スタッフでプログラムの流れなどを確認します。



6 参加者の受付

そして本番。美術館のロビーで、事前申し込みをした家族がやってくるのを待ちます。



7 プログラム開始

時間になったら、今日やること、展示室内でのルールなどを確認して、プログラムが始まります。鑑賞と創作、説明や移動の時間などを含め、2時間のプログラムです。



8 ふりかえり

プログラムが終わったら、担当者と教育普及室スタッフで反省会をします。次の回に活かせることがあれば申し送りをを行い、ブラッシュアップしていきます。



あかるいところ くらいところ

さがしてみよう!絵の中のヒカリ 作ってみよう!光の世界

絵の明暗に注目して鑑賞した後、カラーセロハンを好きな形に切って組み合わせ、色の重なりを楽しみました。

鑑賞作品 ジョルジョ・ヴァザーリ《ゲッセマネの折り》1570年頃(?)、コルネリス・デ・ヘーム《果物籠のある静物》1654年頃、ギユスターヴ・ドレ《ラ・シエスタ、スペインの思い出》1868年頃

企画担当者 磯田 暉子、長井 靖子、西田 通子

実施日程 2016年4月2日、4月16日、5月7日、5月21日

実施回数 08回 **参加者数** 120人



STEP 01

導入

「電球、太陽、ろうそく・・・連想するものは?今日のテーマは“光”です。皆で絵の中のヒカリを探しに行きましょう。」



STEP 02

鑑賞

展示室では、最初に2点の絵を見ます。絵の中の明るいところと暗いところはどこか、そしてその光の表現に着目しながら鑑賞します。



STEP 03

アクティビティ

「かんがえてみましょう!」

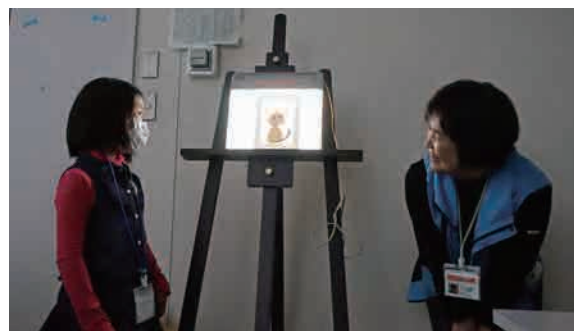
3点目の絵は、家族ごとにワークシートを使って鑑賞します。質問に沿ってその絵をじっくり見た後、光の表現に注目しながら、赤のシールは絵の中の一番明るいところに、青のシールは一番暗いところに、矢印形のシールは光の当たっている方向に貼っていきます。



STEP 04

創作

ワークショップ室では、展示室で見た作品を振り返り、創作に入ります。12色用意したセロハンを好きな形に切って、重ね、ラミネートフィルムにはさみ、光の世界を作ります。最後に額縁をつけて完成!



STEP 05

発表

作った作品を一人ずつライトボックスに置き、工夫したところ、気に入っているところなどを発表します。



企画担当ボランティア・スタッフの声

《果物籠のある静物》の鑑賞では果物に光があたっている白い点を取ったパネルを作り比べてみました。子どもより大人の反応が大きかったのが意外でした。発表ではセロハンをラミネートした作品を、ライトボックスの前に置きました。部屋の電気を消した瞬間、光を通した作品の変化に子どもたちの目が輝いたのが忘れられません。(I.K.)

テーマに沿った創作を何にするか悩みました。セロハンをラミネートして作るスタンドグラス風の作品は、子どもも大人も自由な表現を楽しめる物です。制作途中セロハンが静電気で動いてしまう苦労もありましたが、ライトボックスに置いて光を通すとパッと輝いて美しく、皆笑顔で自作を披露してくれました。(N.Y.)

参加者の声

きょうはいちばんたのしかったことはこうさくです。このほか、いろいろつくったえをみせてくれてありがとうございました。(7歳児)

いろんな子と話せて楽しかった。(8歳児)



セロハンで色をくふうするのが楽しかった。(8歳児)

さいしょに絵を見た時はむずかしかったけれど、せつめいが分かりやすくて、そうぞうできて、いけんが言えました。もんだいではお母さんと二人でなかよくすごせてうれしかった。(9歳児)



娘が大人の予想しないことを考えていることに気づきました。(6歳児の親)

絵の見方をみんなで考える機会を持てとても楽しかった。子どもたちが自分で考えたことを理由とともに話している姿はとても勉強になりました。(6歳児の親)

光をテーマにして、どこに光が当たっているかなど、シールも使って、話し合いをしたのが、子どもも興味を持って取り組めて良かった。(8歳児の親)

セイビのたてもの再発見！2016

本館が世界遺産になったよ！でも世界遺産で何だろう？おもしろいかな？すごいかな？たてもの探検に出発しよう！

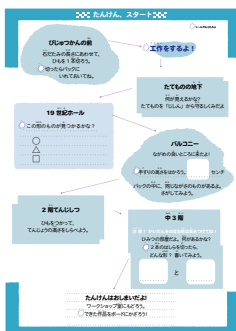
本館と前庭の「建築ツアー」を体験し、建物の材料に使われているコンクリートでペーパーウェイトを作りました。

建築ツアーでまわる場所 美術館正面・前庭、19世紀ホール、バルコニー、中3階、2階展示室、免震装置コーナー

企画担当者 井上 直子、谷口 武教、鈴木 伊知子

実施日程 2016年9月3日、9月17日、10月1日、10月15日、11月5日、11月19日

実施回数 12回 参加者数 178人



STEP 01

導入

「世界遺産の仲間入りした前庭と本館を、探検グッズを使って、おうちの人と協力しながら皆で探検してみましょう。ミッション達成ごとに、たんけんシートにシールを貼って、全部集まると一つの言葉が完成します。」

←たてものたんけんシート(裏)

STEP 02

建物の鑑賞

前庭に出て、建物の外側や柱、前庭の床に注目して、色や模様、素材がどうなっているかを一緒に見ていきます。前庭の床は様々な大きさの長方形に区切られています。その一つに合わせてスズランテープを切ると…その長さは113cm。

STEP 03

創作

ワークショップ室では、建物に使われているコンクリートを使ってペーパーウェイトを作ります。決められた量のコンクリートの粉と水をコテでよく混ぜて、経木と新聞紙を底に敷いた型に流し込みます。砂・おはじき・ビー玉・貝殻・石を使ってコンクリートに飾りつけます。



STEP 04

建築ツアー

作品が固まるまで、2グループに分かれて建物をまわります。たんけんシートで、建物の中にある形や質感を確認し、場所ごとの景色を楽しみます。最初に前庭で切ったスズランテープと同じ長さのところがあるかを探して、ル・コルビュジェが考案した「モデュロール」について説明します。



STEP 05

発表

ワークショップ室へ戻り、出来上がったペーパーウェイトを展示ボードに展示します。展示ボードの前で記念撮影をします。たんけんシートに最後のシールを貼り、言葉を完成させると…正解は「せかいさん」。

←たてものたんけんシート(表)

企画担当ボランティア・スタッフの声

本館の建物を語る上で、ル・コルビュジェの印象的なファサードは外すことが出来なかったと思います。工作ではコンクリートと小石など本館をなす素材を取り入れながら、個性も表現出来るように、ガラス・貝殻・砂なども使いました。制作過程は少し複雑でしたが、子どもたちはコンクリートを自分で混ぜる体験を新鮮に感じたようです。(I.N.)

参加者の声



ぼくがしらなかったこともしたし、このびじゅつかんをせつけいた人の考えもすごかったので、かんしんしました。(8歳児)

じぶんのきじゅんのたんいを作ってたてもの、ということがわかってよかったです。(9歳児)



「探検」を通して親子で楽しく話しながら感動を共有できました。(7歳児の親)

建物の説明が子どもにも大人にもわかりやすく楽しく学べました。西洋美術館の楽しみ方をまた新たに知ることができました。(8歳児の親)

コンクリートを作って楽しかった。色々なみつの場所に行けて楽しかった。また「どよびじゅつ」に参加したいです。(9歳児)

息子は数が好き、測るのが好きな年頃なのでモデュロールを2人で体感できました。写真や本では頭に入らないことが実物、空間を目にするですと吸収できる、そのことを実感しました。(7歳児の親)

わくわく☆わ〜く!!

絵の世界をのぞいてみよう 額のかざりをつくってみよう

絵の「額」に注目しながら展示室で絵を見た後、段ボールでオリジナルの額縁を作りました。

鑑賞作品 バルトロメオ・モンターニャ（に帰属）《城の見える風景》15世紀末-16世紀初頭、アンドレア・デル・サルタ《聖母子》1516年頃、レアンドロ・バッサーノ《最後の審判》1595-96年頃

企画担当者 稲森 珠実、榊原 たまき、中尾 小絵、西田 通子

実施日程 2017年3月4日、3月18日、4月1日、4月15日、5月6日、5月20日

実施回数 12回 **参加者数** 176人



STEP 01

導入

「今日は、絵だけでなく『額』にも注目してみましよう。」



STEP 02

鑑賞

展示室では、2～3点の絵を見ます。絵には色々な形のものがあることを確認し、「きらきラスコープ(筒)」を使って絵の細部をのぞいてみます。また、額縁のデザインや模様、それらが絵の内容と関係していることなどに触れながら鑑賞します。

STEP 03

創作

ワークショップ室では、見てきた絵の形や額縁について振り返り、今度は参加者がオリジナルの額を作ります。5点の中から好きな絵を選び、台紙に選んだ絵を貼ります。その上に額の土台となる段ボールの枠をつけ、さらに別の段ボールを自分の好きな形に切って飾りつけていきます。額ができたら、後ろに紐をつけて、全員の作品を飾ります。



STEP 04

発表

工夫したところ、気に入っているところ、難しかったところ、家で飾りたい場所などを発表します。



企画担当ボランティア・スタッフの声

「わくわく☆わ〜く!!」では、文字通り「わく(枠)」=「額」に注目しました。様々な額に囲われた絵をキラキラスコープで観察。子どもたちには作品も額も同じくらいに興味津々。額って面白い!最後に段ボールで自分だけの額を制作。道具や素材の安全にも気を配りました。同期の仲間と企画した私にとって思い出深いプログラムです。(I.T.)

「わくわく☆わ〜く!!」は、額の形に注目したプログラムでした。「キラキラスコープ」と名付けたツールを使い、絵を覗き込むことで、子どもたちに楽しく鑑賞してもらえるように工夫をしました。創作の方も、誰もがわかりやすく楽しく創作出来るように、スタッフ皆さんも楽しみながら試作を繰り返して決めていきました。(S.T.)

参加者の声

絵をかきつするの一点一点じっくり見ていたのでもいつも見えていないものが見えてくる気がしました。(7歳児)

絵に合わせて自分で考えたがくがつくれて楽しかった。(9歳児)



「がく」にちゅうもくしたら、シンプルな「がく」があったり、ボコボコのめだつ「がく」があったりしました。えにあう「がく」をえらんだら、もっと、えがすてきになると思いました。(9歳児)

娘は絵に興味を持ってないかと思っていたのですが、とても楽しんでいました。もし2人で見ていたら気づけないことを導いていただき、何百倍も濃い経験になりました。(6歳児の親)



あまり額縁に着目したことがなかったので興味深かったです。素通りしてしまうような一見地味な絵でもよく見るとおもしろいなと思いました。(8歳児の親)

普段美術館で1枚の絵をじっくり見ることがないので良い経験ができたと思います。額を作る時、娘と色々相談しながらできました。私より制作も早く、決断力があるなと感じました。(7歳児の親)

今日は学びばかりでした。他の方々の発想やアイデアにおどろきました。(8歳児の親)

コネコネ・ペッタン! ねんどで遊ぼう!

展示室で見る絵をヒントに、みんなで作品を作ります。家族いっしょにカラフルねんど!

モチーフの組み合わせに注目して静物画を見た後、紙粘土を組み合わせて、家族で一つの作品を作りました。

鑑賞作品 エドワルト・コリール《ヴァニタス―書物と隣體のある静物》1663年、コルネリス・デ・ヘーム《果物籠のある静物》1654年頃、エヴァリスト・バスケニス《楽器のある静物》1660年代後半、フアン・パン・デル・アメン《果物籠と狸鳥のある静物》

企画担当者 小森 絵美、島崎 さゆり、夏目 敬子、向山 裕子

実施日程 2017年9月2日、9月16日、10月7日、10月21日、11月4日、11月18日

実施回数 12回 **参加者数** 176人



STEP 01

導入

「今日は、展示室で絵を見た後、それをヒントに紙粘土を使って作品を作ります。」



STEP 02

鑑賞

展示室では、絵をよく見てもらうために、2グループに分かれて、2点ずつ静物画を見ます。1点目の絵では描かれているものをしっかり見て、見つけたものや気づいたことをグループごとに話し合います。



STEP 03

アクティビティ「果物籠」

2点目の絵では色々な色や形の果物などがどのように描かれているか、どのように組み合わせ描かれているかを観察します。その後、配られた台紙に果物のパーツを組み合わせて自分なりの果物籠を作ります。



STEP 04

創作

ワークショップ室では、展示室で見た作品を振り返り、創作に入ります。「家族で一つテーマを決めて、紙粘土で色々なものを作ります。最後に家族で作ったものを台の上に並べてみましょう。」違う色の紙粘土を混ぜ合わせたり、組み合わせたりして作ります。



STEP 05

発表

全家族で作品を披露し合い、「テーマ」と工夫したところや難しかったところ、気に入っているところ、飾りたい場所などを発表します。



企画担当ボランティア・スタッフの声

突然、荒海に投げ出された様な、先行きの見えない不安と迷走の連続でしたが、ご参加の皆さんが、カラフルな作品を楽しそうに作りあげ、その力作を生き生きと発表する姿は、私に多くの喜びをもたらしました。このプログラムで誕生した果物籠のパーツセットを見ると、その時の感動が甦り、いつも熱い気持ちになります。(S.S.)

参加者の声

ねんどできょうりゅうを作ったことがたのしかった。(6歳児)

ねんどこねたり、くだものおいたり、たのしかったよ。(6歳児)



大きなえや、りったいにみえるえがきれいだとおもいました。(7歳児)

ねんどをつくらっているときにぼらんでいあの人たちがきょうずだねとかすごいねってしてくれたのでうれしかったです。(8歳児)



1つの作品をゆっくり時間をかけて、子どもと一緒に見ることが出来て良かったです。(6歳児の親)

子どもと何かを作るということを普段していないので、同じテーマで考えることの楽しさを感じました。(6歳児と8歳児の親)

息子と一緒に作品を作って楽しめました。フルーツを並べるのも楽しかった。息子が作りたいものと私が作りたいものがいつも違うのは面白い。(8歳児の親)

静物画を見て想像してみることも、子どもにとってとても楽しいんだと改めて感じられてよかったです。(9歳児の親)

ホントはにぎやかか?びじゅつかん!

聞こう・絵の音、つくり・音の絵

絵の中の音を想像しながら作品を鑑賞した後、色紙やフェルトで音を表現したコラージュ作品を作りました。

鑑賞作品 ヴィルヘルム・ハンマースホイ《ピアノを弾く妻イダのいる室内》1910年、ジャクソン・ポロック《ナンバー・8、1951 黒い流れ》1951年、サム・フランシス《ホワイト・ペインティング》1950年 他

企画担当者 片岡 礼子、小森 絵美、中尾 小絵、西田 通子

実施日程 2018年3月3日、3月17日、4月7日、4月21日、5月5日、5月19日

実施回数 12回 **参加者数** 183人



STEP 01

導入

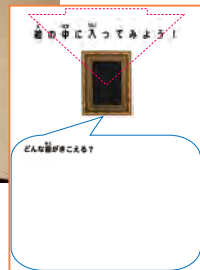
「展示室の中は、作品を他の人たちと一緒に鑑賞するところだから、とても静かなの。だけど、絵の中にはね、たくさん音が隠れていて、とってもにぎやかだったりするんだよ。今日はみんなと一緒に絵をよーく見て、『絵の中でかくれんぼしている音』を探してみたいと思います。」



STEP 02

鑑賞

展示室では、最初に1点の絵を見ます。「何が描いてある?」「どんな音が聞こえてくる?」静かに感じられる絵の中にも、音があることに気がつきます。



STEP 03

アクティビティ

「絵の中に入ってみよう!」

2点目の絵は、2グループに分かれ、家族ごとにワークシートを使って鑑賞します。それぞれが引いた「作品カード」の絵を探し、話し合いながらどんな音が聞こえたかワークシートに記入します。時間になったら、家族ごとに作品の前で、記入したことを発表し合います。

●参加者のメモより

「どんな音が聞こえる?」

《しけの日》ごーごー、ザブンザブン、バシャーン、びゅうびゅう、雨がふっている音、あらしの音、小舟のこく音、人がさげんでいる音、ほがバサバサなる音など



STEP 04

鑑賞

最後は皆で、並んだ2作品を見ます。「音がたくさん聞こえてくるのはどちらの絵だと思う?」「どちらの絵が好き?」2作品の間の床に引いた線をまたいで、直感で答えだと思った絵の方に移動します。創作のヒントになるよう、抽象画からも音が想像できることを共有します。



STEP 05

創作

ワークショップ室では、展示室で見た作品を振り返り、創作に入ります。色紙、色画用紙、フェルトを好きな形に切って、自分がどんな音の絵を作るか考えながら、ラミネートフィルムにはさみ、「音の絵」を作ります。



STEP 06

発表

自分の作った作品が、「どんな音か」、工夫したところや気に入っているところなどを発表します。

企画担当ボランティア・スタッフの声

鑑賞では、一見静かな絵の中にも音があることに気づくというはじまりから展開していきました。参加したファミリーが絵の中から聞こえてくる音について話す姿に心温まりました。ワークショップ室での創作は、1人1枚ずつ音のイメージをコラージュした作品を作り壁に貼ることで、色とりどりな音を楽しみました。(K.E.)

『美術館ではお静かに!』その常識が子どもたちを委縮させている?そんな疑問から生まれた、作品を「聴く」ことから始めて作品の中で子どもたちの五感と想像力を開放しようという試みでした。戸惑いながらも果敢に挑む子どもたちの眼が次第に輝きだしたことが、保護者の方々からのアプローチに好評価を頂いたことが良き思い出です。(N.M.)

参加者の声

えの音がきれいだったり、ひくかったり、高かったり、小さかったり、大きかったり、いろいろあっておもしろかったです。(7歳児)

絵に音を感じ出すと、絵が動き出す気がして、命が吹き込まれるようでした。(6歳児と8歳児の親)

らぶ♡らぶ フロッタージュ

こすって作ろう あんな色こんな色 こすって遊ぼう ○△□

絵の色や形の重なり注目しながら3点の絵を鑑賞した後、色鉛筆と厚紙でフロッタージュ作品を作りました。

鑑賞作品 ウィリアム・アドルフ・ブーグロウ《音楽》1855-56年頃、エドゥアール・マネ《花の中の子供（ジャック・オシュデ）》1876年、クロード・モネ《ヴェトゥイユ》1902年、アルベル・グレース《収穫物の脱穀》1912年

企画担当者 小森 絵美、福住 久栄、牧 幸子

実施日程 2018年9月1日、9月15日、10月6日、10月20日、11月3日、11月17日

実施回数 12回 **参加者数** 186人



STEP 01

導入

「美術館の中には、たくさん色や形が隠れています。今日は、皆さんと一緒に、絵をよく見ながらお話して、その後、世界に一つしかない自分だけの作品を作しましょう。」



STEP 02

鑑賞

展示室では、最初に全員で話しながら1点目の絵を見ます。「どんなものが見える?」「どんな色が使われているかな?」



STEP 03

アクティビティ

「作品を見つけるゲーム」

2点目の絵では、2グループに分かれて、子どもたちに絵の一部が印刷された短冊を引いてもらい、それをヒントに家族ごとに絵を見つけるゲームをします。全員で見つけた絵の前に行き、それぞれの短冊をその絵が印刷されたボードの該当する部分に置いていきます。絵の中の様々な色味やタッチに注目して鑑賞します。



STEP 04

鑑賞

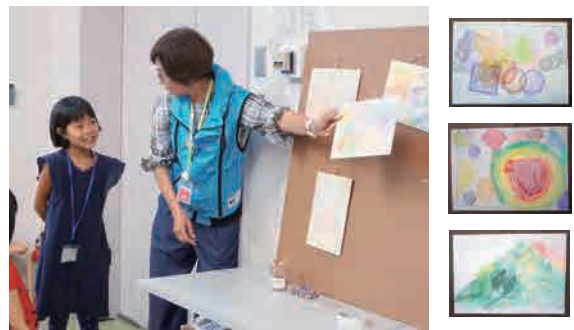
3点目の絵では、絵全体の色や描かれているものを全員で見つけて、色々な形が組み合わさって一枚の絵になっていることを共有します。また、家族で絵の題名を考えて順番に発表します。



STEP 05

創作

ワークショップ室では、展示室で見た作品を振り返り、創作に入ります。タイトルの「らぶ(rub)」や「フロッタージュ」の意味を説明し、段ボール台紙に○△□の形に切った紙を自由に配置し、別の紙を被せて色鉛筆で上からこすっていきます。最後に台紙の裏にひもをつけて完成!



STEP 06

発表

全家族に作品を披露してもらい、作品の工夫したところ、難しかったところ、飾りたい場所、気に入っているところ、題名が決まっていたら発表してもらいます。

企画担当ボランティア・スタッフの声

恐る恐る入った2階のワークショップ室は、こぢんまりとアットホームな雰囲気毎打合せが楽しみでした。皆で協力して考えた内容は、実践するとしっくりこなくて何度も振り出しに。途中でまさかの展示替えにも遭遇し、難産の末に完成した企画は我が子のように愛おしいです。楽しかった!参加者の言葉に笑みがこぼれます。(F.H.)

大人も子どもも夢中になって、こすって、こすって、○、△、□。ご自慢のフロッタージュ作品と満面の笑みで「楽しかった!!」の一言、うれしかったです。鑑賞用に選んだ作品が他館に貸出になるハプニングがありました。アクティビティの短冊と鑑賞作品の色の明度、彩度に違和感がないよう色調にこだわりました。(M.S.)

参加者の声

かさね方しだいで、色が出かたがちがったりして、新しい発見をしました。(9歳児)

とても緊張する子で発言するところを見たことがありませんでしたが、自分の感じたことや思ったことを話している姿にとっても驚きました。(8歳児の親)

ボン・ボヤージュ!

旅によう絵の中へ、行ってみたい絵はどれですか?

作品の中を旅するように鑑賞した後、一番気に入った作品のイメージや思い出を詰めてトランクを作りました。

鑑賞作品 ジャン＝フランソワ・ミレー《春(ダフニスとクロエ)》1865年、マックス・エルンスト《石化した森》1927年 他

企画担当者 片岡 礼子、窪田 光江、小森 絵美、清水 悦子、吉田 早苗

実施日程 2019年3月2日、3月16日、3月30日、4月6日、4月20日、5月4日
実施回数 12回 参加者数 185人



STEP 01

導入

「今日は、皆さんをちょっと変わった旅にお連れしようと思います。美術館の中でいろんな作品に出会い、作品の中に入って想像を広げて旅をしましょう。ボン・ボヤージュ!」



STEP 02

鑑賞

展示室では、2グループに分かれて、最初に絵を2点見ます。「ここはどんな場所かな?」「この絵の中に入ってみたいなら、どんな匂いや音がする?」「ここでどんなことをしたい?」今回のキーワード、旅に着目しながら作品の世界に入り込んで鑑賞します。



「絵のなかへ旅したことを自由にメモしよう。どんな場所かな?ここでどんなことしてみたい?」

●参加者のメモより

《民にかかった狐》きつねが「たすけて」といっているようす、かわいそう、雪の中でさむそう
←春がちかいのかな?、きつねをたすけてあげたい

STEP 03

アクティビティ

「オプションルツアー」

家族ごとに作品が載ったガイドマップから1～2点の絵を選び、旅をするヒントが書かれたワークシートを使って鑑賞します。



STEP 04

創作

ワークショップ室では、展示室で見てきた絵の中から、気に入った絵を選んで、そこから自分が感じたこと、心に残ったイメージや思い出をトランク型の箱の中に自由に表現します。絵の画像を印刷した紙、色紙、羊毛、毛糸などでトランクの中を作り、箱の外側に持ち手をつけて完成!



STEP 05

発表

一人ずつ作品を披露してもらい、どの絵を作品にしたか、工夫したところ、気に入っているところなどを発表してもらいます。

企画担当ボランティア・スタッフの声

「絵の中に入って旅をすることができたら」と想像を広げる楽しさを、どんな形のプログラムにしようかと、教育普及室の皆さまと一緒に何度もミーティングを重ねました。旅のお供の地図や、旅の思い出を表現する台となる段ボール製の小さなトランクケースなど、試行錯誤の末に素敵なアイテムを作り出すこともできました。(K.M.)

絵の中へ旅に出よう!そんな心躍るこのプログラム。マップ片手に選んでもらう旅先は、美しい風景画だけではなく、抽象画や少し怖い絵も。皆さん作品から想像を飛ばたかせ、自分だけの素敵な旅をしてくれました。中でも子どもたちは、剣を持つ亡霊に果敢に挑んだり、翼にかかった狐を一生懸命助けてあげたりと大活躍でした!(K.R.)

参加者の声



きょうは、はじめてだったけど、えをいっぱい見られてたのしかったです。え、すごかったです!! (7歳児)

色々な絵があって、ふしぎに思ったり、ドキドキするようなかんじも心にのこりました。またさんかして、いろいろな絵をぼうけんしてみたいです! (9歳児)



子どもがとても夢中になっており、新しい一面が見られました。改めて子どもたちのイメージの豊かさに感動しました。(6歳児の親)

グループ(赤・青)だけでなく、家族単位で動ける時間帯があって良かったと思います。(子どもが恥ずかしがりなので) (9歳児の親)

絵を見るとき、どんなにおいや音がしそうか、きせつはいつかをそうぞうするのがおもしろかったです。また、工作ではその絵のどんなところを見てほしいかを考えて工夫したのがたのしかったです。(9歳児)

1枚の絵をじっくりと想像しながら見ることで、それをさらに広げてイメージする、表現するのは楽しい時間でした。(7歳児と9歳児の親)

ココロでコラージュ

みんなで気持ちをあつめちゃお！

絵に描かれた人物の気持ちに注目して作品を鑑賞した後、様々な素材で自分の気持ちを表した被れるコラージュ作品を作りました。

鑑賞作品 アンゲリカ・カウフマン《パリスを戦場へと誘うヘクトール》1770年代、ヤーコブ・ヨルダーンズ（に帰属）《ソドムを去るロトとその家族（ルーベンスの構図に基づく）》1618-20年頃 他

企画担当者 浅野 尚代、大谷 愛子、鎌田 千束、島崎 さゆり、牧 幸子

実施日程 2019年9月7日、9月21日、10月5日、10月19日、11月2日、11月16日 **実施回数** 12回 **参加者数** 175人



STEP 01

導入

「絵の中にいる人たちに会いに行ってみよう。その人たちの“気持ち”を集めてみましょう。どんな人が待っているか楽しみだね。」



STEP 02

鑑賞

展示室では、2グループに分かれて、最初に絵を2点見ます。「絵の中のこの人たちはどんな人たちなのか？」「ここで何をしているのかな？」「何て言っていると思う？」登場人物の仕草や表情を読み取りながら気持ちやセリフを想像して鑑賞します。



STEP 03

アクティビティ「気持ちのパレット作り」

3点目の絵は、家族ごとに引いたカードとパレットを使って鑑賞します。カードに書かれた質問に沿って、絵の中の人物の気持ちに注目しながら、その気持ちに近い言葉をマグネットから探してパレットに貼っていきます。「楽しい」「ドキドキ」「イライラ」「疲れた」など色分けされた様々な気持ちのマグネットがあり、ぴったりした気持ちがない場合は付箋に書いて貼ります。



STEP 04

創作

ワークショップ室では、展示室で見た作品を振り返り、創作に入ります。頭に被れる形の台紙に色紙、セロハン、糸、ストローなどの様々な材料から色や形を選び、コラージュして、今度は自分の気持ちを表します。最後に被れるか確認して完成！



STEP 05

発表

作った作品を頭に被り、一人ずつ工夫したところ、気に入っているところなどを発表します。



企画担当ボランティア・スタッフの声

担当スタッフとプログラムを0から考え、アイデアを出し合い、話し合い、一つ一つ積み重ねていく過程がとても充実していて楽しかったです。本番直前のトライアルで多くの意見が出て、プログラム内容が大幅変更の危機？もありましたが、出来上がった時の達成感、仲間と共に過ごした時間はかけがえないものとなりました。(A.N.)

白熱する企画会議、どの提案も捨てがたい面白さ。凡人の私は溢れるアイデアの前に、あっけにとられるばかりでした。でも何かやらなきゃと努力したのが、創作物のサンプル作り。全員のアイデアを盛り込んだ被れるお面は、まるで歩くお神輿のようになりました。運んだ電車の中で恥ずかしかったのも、良い思い出です。(K.C.)

参加者の声

きもちをいっぱいみつけられました。(6歳児)

絵の中にある小さいものや大きいものの気持ちをかんがえると、絵をかいたりゆうがわかりました。(7歳児)



絵にいる人の気持ちを考えたのは初めてでした。だから、さいしょはむずかしかったのですが、できたときはうれしかったです。(9歳児)

ワークショップで自分の気持ちを色紙やポンポンで作るのが楽しかったです。(9歳児)



絵を見て言葉にすることは楽しかったです。自分の中の気持ちを表に出すことで、心が解きほぐれていくような思いになりました。(6歳児と9歳児の親)

始めはつまらなそうだった娘も、途中から楽しいを連発していました。見た絵によって“気持ち”の言葉の量が左右されるのも面白かったです。(7歳児の親)

絵を見てどう思うか話をしたことがとても良かったです。マグネットで貼るのも話をするきっかけになり、絵を見るのが楽しくなりました。(7歳児の親)

子どもの成長と考えていることを知ることができて、うれしく感じました。(8歳児の親)

トライアルの様子

ボランティア・スタッフが参加者になったつもりで、プログラムを体験し、意見を出し合い、本番へ向けて最終調整を行います。



2009年度からスタートした、主に大人を対象としたギャラリートーク。常設展示室の作品を前庭の彫刻を取り上げて行く、約50分間のプログラムです。

トークのテーマを取り上げる作品、話す内容などは全てボランティア・スタッフ自身が考えます。説明はわかりやすいか? 選んだ作品は大人数でも見える大きさか? 移動距離が長すぎて、参加者が疲れてしまわないかなど、様々なことに気を配りながら、初めて来館する方も気軽に楽しめるように一緒に鑑賞していきます。

実施日 | 第1・3・5土曜日、毎週日曜日 通年、休館日を除く
時間 | 11:00~11:50 (2017年度~実施)、13:00~13:50
参加方法 | 申込不要
定員 | なし

美術トークで解説するテーマと作品を一部紹介!

ボランティア・スタッフがテーマと作品を決めて行ったある日の美術トークです。テーマと作品はトークによって変わります。

テーマ「新収蔵作品を中心に」

- ① アンドレア・デル・サルト (本名: アンドレア・ダーニョロ・ディ・フランチェスコ) 《聖母子》1516年頃
- ② ティツィアーノ・ヴェチェリオと工房《洗礼者聖ヨハネの首を持つサロメ》1560-70年頃
- ③ ファン・バン・デル・アメン《果物籠と鴉鳥のある静物》
- ④ アンゲリカ・カウフマン《パリスを戦場へと誘うヘクトール》1770年代 他1点

テーマ「思い立ってイタリアへ」

- ① ヤコポ・デル・セッライオ《奉納祭壇画: 聖三位一体、聖母マリア、聖ヨハネと寄進者》1480-85年頃
- ② ジョゼフ・ヴェルネ《夏の夕べ、イタリア風景》1773年
- ③ ジャン=ヴィクトール・ベルタン《イタリア風景》1812年
- ④ ジャン=バティスト・カミーユ・コロー《ナポリの浜の思い出》1870-72年
- ⑤ モーリス・ドニ《シエナの聖カテリーナ》1921年 他3点



美術トーク



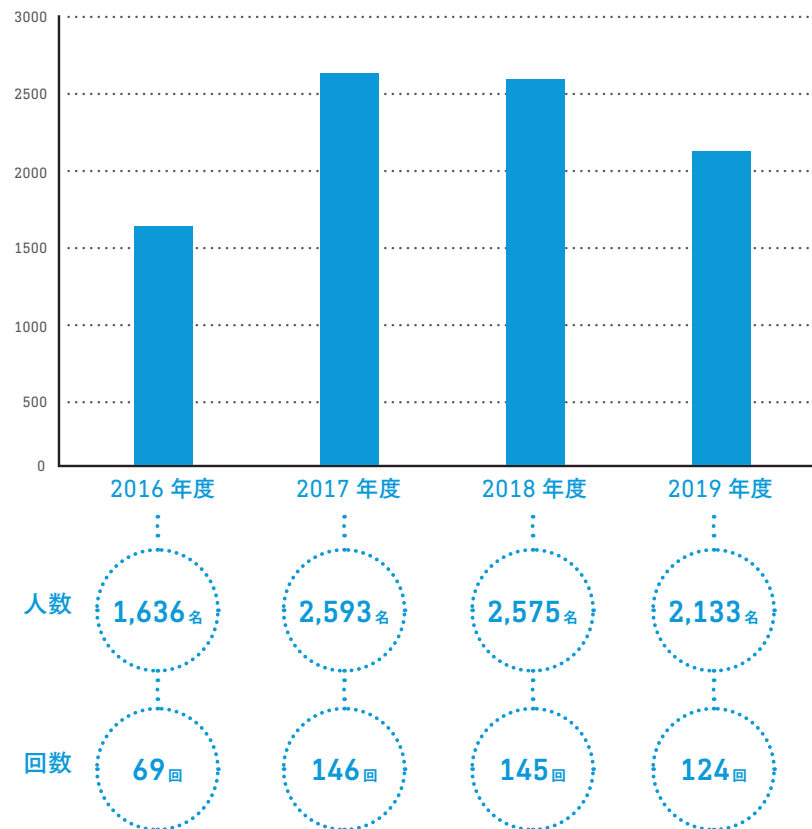
2016年度以降の傾向

以前までは開催日の午後に行っていたトークを2017年度からは午前中も加え1日2回へと回数を増やしました。そのため、2017年度からは2016年度の約2倍になり、参加者数も大幅に増えていることがうかがえます。2019年度の回数と参加者数が減っているのは、展示替えによる休館の期間があったことや新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のためにプログラムを実施できなかったことが影響しています。

また、「国際博物館の日」にも担当者を募り美術トークを行っています。

初めて参加する人も多く見受けられますが、リピーターも多くいます。何度も参加してくれる方が存在するのは、「同じ作品でも、トークする人によって切り口が異なるから面白い」といった理由があるようです。画一的な内容ではなく、ボランティア・スタッフが入念に準備して練り上げた個性豊かなトークが、こういったリピーターを生み出すことにつながっているのでしょう。

美術トーク参加者数のデータ



※新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため2020年2月25日～3月31日全プログラム中止

実施までの流れ

1 シフト作成

3ヶ月ごとに各自の担当日を決めます。希望日を聞いてシフト表を作る作業もボランティア・スタッフが行います。



2 トーク準備

自分の担当日が決まったら、その日に向けて準備開始。



3 館内に告知

担当者はトークをする週の半ばまでに、取り上げる作品やテーマを記したリストをボランティア・スタッフと教育普及室共有のウェブサイトへ掲載します。監視スタッフがそのリストを印刷し、当日、館内に掲示します。



4 最終確認

トーク当日は作品の位置や動線の確認など、最後の準備をします。



5 集合場所で待機

トークが始まる少し前に、展示室内の集合場所で待機。近くにいる人に声をかけて、参加を呼びかけることもあります。



6 トーク開始

時間になったら、トークを開始します。所要時間は約50分。約5～6作品を当日の参加者と鑑賞していきます。



7 報告書

トーク終了後、数日中に報告書を教育普及室との共有ウェブサイトへ書き込みます。取り上げた作品やテーマ、参加者数やトークの内容に加えて、うまくいったこと、反省点などを他のボランティア・スタッフと共有して、次のトークに活かします。



わたしのおすすめ作品

自分にとっての当館所蔵作品の見どころや魅力について、美術トークを担当する四期ボランティア・スタッフ、五期ボランティア候補生へ尋ねてみました。

四期ボランティア・スタッフへの質問！

「3年間の活動を経た今、あなたのおすすめ作品は？」

五期ボランティア候補生への質問！

「2019年度の養成研修を終えた今、参加者と一緒に見たい作品は？」

スケッチャ

(本名ジョヴァンニ・ディ・セル・ジョヴァンニ・グイーディ)

《スザンナ伝》
テンペラ、板



旧約聖書外伝にあるヘブライ人美人妻スザンナの冤罪にまつわるエピソードが描かれています。裁判でスザンナが有罪になり兵士に引き立てられる様子、無罪が証明され彼女を陥れた長老が断罪される様子などがとてもビビッドに描かれています。裁判所で暇そうに待っている兵士や犬がいるのも面白いです。スザンナの無罪を証明するきっかけとなったダニエルが可愛く描かれているのも魅力です。(K.H.)



マールテン・デ・フォス

《最後の晩餐》
油彩、カンヴァス



大振りな画面、登場人物の個性や体の動きまでも感じさせる服装の豊かな色彩。見映えのするこの作品の中に、私自身が入り込んだかのような感覚になる。《最後の晩餐》という大抵はレオナルド・ダ・ヴィンチの作品を思い浮かべるであろう。しかしデ・フォスの作品は、「ユダの裏切り」という重苦しい主題と同時に、画面全体から醸し出される静けさによって、「大切な儀式」という新しい《最後の晩餐》のイメージを私に与えた。(U.M.)



ファン・バン・デル・アメン 《果物籠と猟鳥のある静物》 油彩、カンヴァス



窓枠のような石の台の上に横一列に、溢れそうなほど盛られた果物籠や野菜が並び、両端には猟鳥が吊るされるという構図。これらの静物は、大きな画面いっぱいに本物と見紛うばかりの精密さで描かれる。漆黒を背景に光に照らされた静物が浮かび上がり、この対比効果からなにか静謐ささえ感じる。写実の巧みさと華やかさのなかに漂う不思議な静けさ、そんなところに魅かれます。(K.H.)



前景で音楽を奏で踊るサテュロスとニンフたちは何やらとても楽しげです。右手の木陰に座る牧羊神と美しいニンフの結婚を祝う夏の夕暮れの宴でしょうか。木立の奥からはオレンジの滲むような光が射し、からりとした空気感も伝わってきます。こんな穏やかな夕べに、中景の水辺を辿り青く霞む山並みの遠景まで、この広大な理想的風景の中をどこまでも歩いて行く、そんな空想に浸りたくります。(K.M.)

クロード・ロラン 《踊るサテュロスとニンフのいる風景》 1646年 油彩、カンヴァス 文化庁より管理換え



カルロ・ドルチ 《悲しみの聖母》 1655年頃 油彩、カンヴァス



数ある好きな所蔵作品のなかで1点あげるとすると、カルロ・ドルチの《悲しみの聖母》です。ボランティア活動をする前から常設展に行くたびに、真っ先にこの絵の前で暫くたたずんでいます。聖母マリアの表情を暫く見詰めていると、何故か自分の心が洗われていくのを感じ、安らぎを感じるので。この絵は私にとって、ボランティア活動をしたと思ったきっかけの絵画でもあります。(T.S.)



小舟に乗った2人の若い女性が描かれています。2人はくつろいで楽しく話っているようで、優雅な雰囲気を醸し出しています。また画面全体に描かれる水面は、ところどころ、日の光や空の色の反映でキラキラ輝いています。なにか目に入ってくる光がそのまま描かれているように見えます。私を感じるこの作品の魅力は、こうした優雅さと光の描写です。(K.M.)



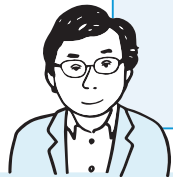
クロード・モネ
《舟遊び》
1887年 油彩、カンヴァス 松方コレクション



フランク・ブラングイン
《しけの日》
1889年 油彩、カンヴァス 旧松方コレクション

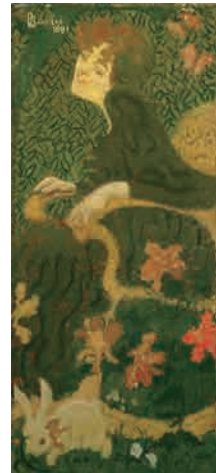


しけの海。うねりに傾く蒸気船に一隻のボートが向かいます。漕ぎ手の役割はひたすら漕ぐことなのにもかかわらず、ひとり後は振返っているようです。ライフセーバーとして荒天の中、カッター訓練をした経験がありますが、こうした状況が生み出す不安感が無意識のうちに振返るという無用な行動をさせたのだと思います。強い緊張感にさらされた救助員たちの気持ちを想像させる作品です。(I.N.)



ピエール・ボナール
《坐る娘と兎》
1891年 油彩、カンヴァス

私はかねてから「浮世絵」に興味を持ち、「浮世絵」に影響されたこの絵を当館で見て、画家ボナールの名を知りました。ボナールの資料や作品を調べるうちに、画家の芸術家らしからぬ風貌や家族を思う態度について知り、多くの身近な主題の作品から感じる穏やかさの中にある構図・色彩に注ぐ熱い思いに触れ、ますます画家と作品に興味を覚えました。この絵は画家が20代の時に制作した初期の作品としても見飽きない絵です。(H.F.)



お客様の自発的な鑑賞を妨げないよう、過不足ない情報をどのタイミングでどう伝えるのか、テーマに沿って作品をどう繋げていくのか等、トークの組立は毎回試行錯誤の連続でした。そのなかで、作品を挟んで様々な人生経験や価値観を持つ方々と共に語り、作品を多視点で鑑賞することで、作品の奥に隠された裏庭を発見し、私自身の鑑賞体験をより深めることができたことに感謝しています。(F.Y.)



書きためたトーク原稿を読み返したら、「もしも」トークで呼びかけをしていたことに気がつきました。「もし今この絵の中に入れたらどんな音が聞こえてくると思いますか?」「もし登場人物に吹き出しをつけたら何て言うでしょう?」「映画のワンシーンみたいでしょ、次のシーンは?」。これがトーク参加の皆さんと一緒に作品の中へいざなう私の「魔法の言葉」になっていたように思います。(K.J.)



その日、その時によって、その作品の印象が変わる不思議な体験をしました。前庭のロダン彫刻も、ナイトトークで見た展示室の作品も、そしてモネの《睡蓮》も、美術トークに参加された方々と、何度も見る事ができたからこそ。絵画は『窓』と、例えられますが、参加された方々とともに見る作品は私にとって、心を開く窓だったのかもしれない。(T.K.)



参加者とのエピソード

(ボランティア・スタッフ報告書より一部抜粋)

トークに参加している間に見ず知らずのお二人が仲良し?になられたようで、帰り際に「好きな作品が同じだった」と教えて下さいました。「ありがとう」と一礼され、お帰りになりました。美術トークが「出会いの場」にもなる、新発見でした。

数人の方が「一人で観ていたら、きっと素通りだったね」と話されているのを聞き、「はい、素通りされる作品を選んでみました」とお答えしたら、笑いがこり、ホッといたしました。

「美術トークを聞きにきました」とおっしゃる方が数組いらっしゃり、嬉しくまた励みになりました。



「やみつきになりそう・・・」とうれしいコメントをくださいました。

終始大きくうなずいて、随所に「へー」をはさんでくださる方が多く、リラックスしてトークができました。うなずき&「へー」を言っていたら、なんだかとても勇気がでけます。傾聴って本当に何事においても大切ですね。私も日ごろから心がけている点です。



肖像画を見た子どもさんの「私の方を見て〜」を始め、1作品目から感想を述べてくださる協力的な参加者の皆様のおかげで楽しく作品鑑賞させてもらいました。



オリジナルの原稿を毎回マイナーチェンジしつつ実施しています。来館者を変えて実施することで気づかされたり、思いついたり、次の新たな発想の源になっているように思います。

建築ツアー

2009年度にスタートした、10歳以上を対象とした建築の解説ツアーです。ル・コルビュジエが設計した本館と前庭を中心に約50分かけてまわります。参加者が「空間を体感すること」を大切にしており、その場にいるからこそ気づく建物の特徴を参加者と共有しながら見ていきます。また、移動しながらも十分に解説を聞けるよう、ツアーではインカムを使用しています。

参加者を2グループに分け、1グループ約10名でツアーを行います。ボランティア・スタッフはグループごとに解説・進行をするトーク担当と、ツアーの進行をサポートするアシスト担当の2名で分担します。紹介する場所は毎回同じでも、解説の切り口はボランティア・スタッフによって様々です。研修で得た知識だけでなく、各自で調べ、学んだことを織り込んだツアーにはそれぞれの個性が反映されています。

実施日 | 第2・4水曜日(2016年9月~実施)、毎週日曜日(2016、2017年度は第2・4日曜日に実施) 通年、休館日を除く

時間 | 15:00~15:50

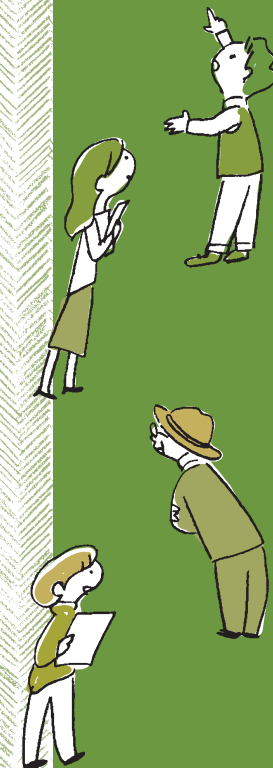
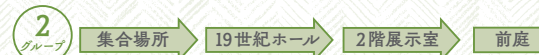
参加方法 | 事前申込制(先着順)

定員 | 各回20名

建築ツアーで案内する主なコースを紹介!

ツアーでは、ル・コルビュジエが提唱した「近代建築の5つの要点」と「無限成長美術館」や「モデュロール」という概念を実際に確かめながら、前庭、本館をまわります。

以下に、ある日の建築ツアーのコースをご紹介します。



2016年度以降の傾向

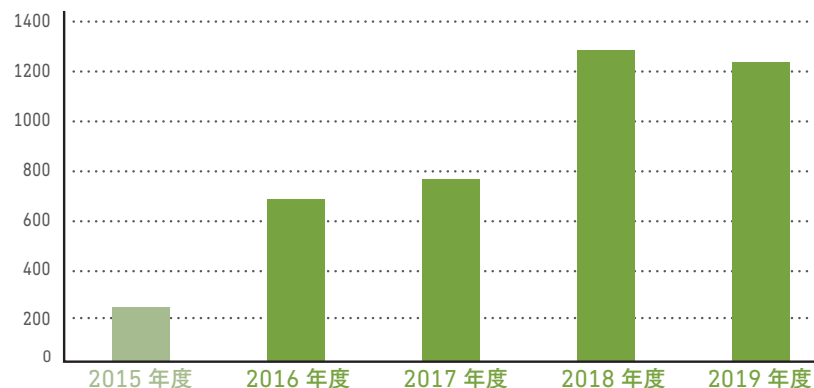
2016年7月17日に国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」が世界遺産一覧表に記載され、以前にも増して当館の建物への関心が高まりました。同時期に、参加方法をこれまでの当日先着順からホームページ上での事前申込制にしました。

また、第2・4土曜日に行っていたツアーを2016年9月以降は、第2・4水曜日と第2・4日曜日、2018年度からは第2・4水曜日と毎週日曜日にと、ツアー回数を増やしました。そのため、2016年度からと2018年度からは参加者数が急激に増えていることがうかがえます。

2019年2月19日～5月19日には、展覧会「ル・コルビュジエ 絵画から建築へ—ピュリスムの時代—」が開催され、普段は見ることのできない旧館長室を織り込んだ「特別建築ツアー」を実施しました。

近年では、小学校や建築学科の高校、生涯学習の団体などからの要望があった際には、別途ツアーを行っています。

建築ツアー参加者数のデータ



| 実施日 | 2015年度 | 2016年度 | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 |
|-----|---------|--------------------|--------------------|------------------|------------------|
| 実施日 | 第2・4土曜日 | 第2・4水曜日 第2・4日曜日 | 第2・4水曜日 第2・4日曜日 | 第2・4水曜日 毎週日曜日 | 第2・4水曜日 毎週日曜日 |
| 人数 | 213名 | 691名 | 783名 | 1,292名 | 1,255名 |
| 回数 | 11回 | 33回 | 46回 | 71回 | 68回 |

※通常の実施日以外にも受け入れを行ったツアー回数、参加者数を含む

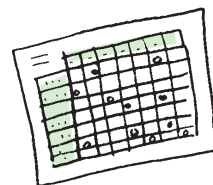
※新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため2020年2月25日～3月31日全プログラム中止

※本報告書は2016～2019年度の実績をまとめたものだが、比較のために2015年度の参加者数データを添付する

実施までの流れ

1 シフト作成

3ヶ月ごとにトーク、アシスト担当者および当日のリーダーを決めます。希望日を聞いてシフト表を作る作業もボランティア・スタッフが行います。



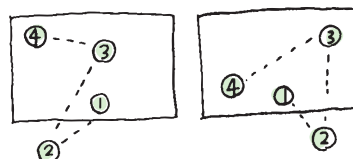
2 ツアー準備

自分の担当日が決まったら、その日に向けて準備開始。



3 ルート確認

ツアー数日前までに、リーダー中心に当日のルートを決めます。2グループで同時にツアーを行うため、ルートが重ならないよう、担当者同士で調整します。



4 事前打ち合わせ・準備

ツアー当日は、事前にボランティア室に集まり、担当者同士で打ち合わせをしインカムや配布するパンフレットの準備をして、集合場所（ロビー）へ向かいます。



5 参加者の受付・ツアー開始

ロビーで看板と机を出して、参加者の受付をし、参加者にインカムとパンフレットを渡します。参加者が定員に満たない時は、当日受付をすることがあります。時間になったら、ツアーを開始します。所要時間は約50分。トーク担当、アシスト担当の2人1組となって参加者を案内します。



6 ふりかえり・報告書

ツアー終了後はボランティア室へ戻り、インカムを片づけ、反省会を行います。その日のリーダーが数日中に報告書を教育普及室との共有ウェブサイトへ書き込みます。参加者数やツアーの内容、当日の様子に加えて、うまくいったこと、反省点などを他のスタッフと共有して、次のツアーに活かします。



わたしのおすすめ建築スポット

自分にとっての当館建築の見どころや魅力について、建築ツアー担当の四期ボランティア・スタッフ、五期ボランティア候補生へ尋ねてみました。

四期ボランティア・スタッフへの質問！

「3年間の活動を経た今、あなたのおすすめ建築スポットは？」

五期ボランティア候補生への質問！

「2019年度の養成研修を終えた今、参加者と一緒に見たい建築スポットは？」

前庭



西洋美術館のおすすめスポットを、9人のボランティアで紹介するよ。この場所が前庭だよ。屋外に本物の彫刻が展示してあるよ。本館はフランスで活躍したル・コルビュジェの設計だよ。パリのエスプリを感じるような軽やかな外観だね。この外壁のパネルはモデュロールという尺度で作られているんだ。入口部分の空間はピロティというんだけど、ここからの説明はバトンタッチだ。(Y.T.)



前庭の床の格子状の線！大小様々に区切られていますね。ル・コルビュジェが考案したモデュロールという尺度で組み合わせられています。さて、足元の格子を向かいの東京文化会館に延長していくと？何ということでしょう！あちらの窓枠も同じようなデザインです！ル・コルビュジェの弟子 前川國男が師匠の建築理念を継承して設計したことがうかがえます。実際に前庭に立ち、見て聞いて気づいた、目から鱗の事実がありました。(K.T.)



ピロティ



柱で建物を支えた壁の無い空間であるピロティは、ル・コルビュジェが提唱した建築理念の一つです。暑い日でも風の吹き抜ける気持ちの良さが魅力です。ガラス越しに館内の様子が見えるので、外部にいながら美術館内部の空気も感じる事ができます。また、広々とした前庭に視界が開けているので解放感があります。私にとっては鑑賞後に安らげる「峠の茶屋」の様な癒しのスポットです。(K.M.)



19世紀ホール



ル・コルビュジェが名づけた、天井の高い吹き抜けのホールです。三角形の天窓から自然光が入り、季節や時間で明るさや見え方が変わり、光と影が色々な表情を見せてくれる印象的な空間です。木の型枠の木目が美しく浮き出たコンクリートの丸い柱、円柱を支えられた高い天井の四角い梁、今は使われなくなった床の照明、2階へのスロープから見る景色の変化など次々と発見がある楽しい空間です。(M.K.)

スロープ



スロープのよいところは足元を気にせずに移動ができることです。このスロープを進むと、ホールの彫刻が目の高さになり、2階の絵画が少しずつ見えてきて、いつの間にかホール全体を見下ろすところになります。このように自分のペースで景色の移り変わりに気づけるのが楽しい！これこそル・コルビュジェの「建築的プロムナード（散策路）」そのものです。スロープで建築を体感してください。(S.A.)



2階展示室 バルコニー



まず、バルコニーの左に立つと、天窓へ向かう三角錐の頂点が頭上にあります。右へ移動すると、19世紀ホールで見上げた柱と梁が間近に見えます。その上の天窓まで、迫力ある空間が自然光に輝き、浮かび上がるようです。更に右を見ると、スロープの上に赤いシャッターの中3階が見えます。展示室側の回廊に目を向けると、中3階への階段が見えます。ル・コルビュジェのバルコニーは驚きと発見の連続です。(N.M.)

2階展示室 中3階



黒い床に浮かぶバルコニーと階段は、役目を終えた今でも彫刻のように美しく、静かに佇んでいます。誘惑と拒否の二律背反を主張しているかのようです。照明ギャラリーは屋上窓の採光構造から、ル・コルビュジェが美術館のために仕掛けた「水平連続窓」ではないかと思えてきます。光の変化を楽しむ自然光から均質な人工光に変わりましたが、「光の箱」は今も展示作品に負けぬ魅力を放っています。(H.I.)

2階展示室



2階展示室の中でも私のお気に入りスポットは、旧館長室下のコーナーからの眺めである。このコーナーから全体を見渡すと、照明ギャラリーの角がまるで軒に見える。この2.26メートルの低く黒い軒の内とこの軒の倍の高さにあたる白い天井との明暗コントラストが、大空間にリズムを演出している。また、中心に目を向けるとバルコニーの一部までが見渡せ、空気の流れまでもが感じられるのである。(N.Y.)



レストランの窓(律動ルーバー)



レストランにある律動ルーバーは、店内からは一部しか見られません。お薦めは、新館1階中庭が見える展示室からの遠望です。ルーバーの右端からゆっくり左に目を移してゆくと、ルーバーに律動(リズム)を感じるかもしれません。私のお気に入りには、日暮れから夜にかけてです。光とともにルーバーの表情がゆっくり変化します。やがて、昼とは違ったリズムを奏で始めるでしょう。(S.T.)



予約に空きがあるときは本館入口で呼び込みをして当日受付をしますが、照れ臭くもあり最初は集客できませんでした。そこで来館者の興味を引くような案内文を考えると定員になるようになりました。ツアーを知らなかった方でも参加後は満足されていたので、一人でも多くの方に「建築ツアー」の存在を知っていただき、西洋美術館やル・コルビュジェの魅力をお伝えしたいと思っています。(H.I.)

2019年、本館で開催されたル・コルビュジェ展での建築ツアーが心に残っています。ル・コルビュジェが設計した建築空間に彼と同時代の作品が並び、その時代の雰囲気を感じることができました。ツアーでは、いつも「感じる」ということを心がけています。歩きながら、または立ち止まって、いろいろな視点で空間を見ていただいて、ル・コルビュジェの建築に対する思いや工夫を感じていただければと思っています。(I.A.)

情報収集のため名建築巡りを始めましたら楽しくて趣味のひとつになりました。お客様には建築素人の自分なるほどと納得したこと、感じたことをお伝えしています。ツアー終了後「よくわかった」「面白かった」という感想をお聞きするとホッと、前日からの緊張感から解放されます。対話型のツアーを心掛けるようになってからはより参加者の皆さんとの一体感が生まれたように思いました。(M.Y.)



2016年国立西洋美術館が世界遺産に登録された年にボランティア・スタッフ養成研修を受け、盛り上がる期待と大いなる後悔と不安の中、翌年よりカチンコチンの状態でお客さまの前に立った事を覚えています。思いがけず参加者の方から優しい言葉を掛けていただいた事も勉強不足で冷や汗ものだった事も多々ありましたが、話題を共有出来る仲間がいてドキドキする機会をいただけたことは幸せなことだと思っています。(T.S.)

声が裏返り、宙に浮いているような感覚のまま館内を一周したデビューガイドから早や2年、やっとお客様の顔を見ながら話すことが出来るようになりました。思いもよらない意外な質問や指摘を受けることがありますが、宿題として調べていくと更に新しい疑問にぶつかり、絡まった紐を辿るように進むのは楽しい発見でした。学習する楽しさのきっかけになるようなガイドが出来ればと思います。(Y.S.)

参加者とのエピソード

(ボランティア・スタッフ報告書より一部抜粋)

夏休みともなり、ツアーのお客様の中に3組ほど親子で参加された方がいらっしゃいました。全体的に控えめな皆さんでしたが、時々頷いてくださったり笑みが溢れたりして反応してくださりました。中学2、3年の生徒と母親が夏休みのレポートに世界遺産について調べるので今回のツアーに参加されたとのこと。世界遺産に登録された理由などはツアーの解説の中で紹介しました。



年配のお客様が「西美には何度も来ているけれど建物については何も知らなかった。偶然参加することができてよかった。」と仰ってくださいました。



(子ども建築ツアーにて)
生徒たちのいろいろな感想や意見を聞くことができました。また、子どもならではの即答も多かったです。今回の建築ツアーで生徒が「外壁の緑の石の中にひとつだけオレンジ色の石があってチョー気になる。」と。ツアー後探してみましたが残念ながら見つかることができませんでした。教えてもらえば良かったと反省。

足が不自由な方がいらっしゃり、館内をゆっくり回りました。

遠方からお見えになったり、初めて西洋美術館にお出でになったお客様も数名いらっしゃり、皆さん一生懸命聞いてくださいました。ツアー終了後に「今日のガイドさんのツアーにまた参加することはできますか？」という質問がありました。



大学生のお一人がリアル・モデュール(183cm)の長身で、優に黒天井まで手が届き一同拍手となりました。おまけにおへその位置も113cmとピッタリで参加者の皆さんから「Oh～!!」と声が上がりました。これによりツアーの雰囲気が一気に和み、みなさんに笑顔になっていただけました。

(2019年「ル・コルビュジエ 絵画から建築へ—ピュリスムの時代」展での特別建築ツアーにて) 旧館長室を見ていただきました。模型が説明するのに効果がありました。窓からの眺めは喜んでいただいたようで、ツアー後に館の外から旧館長室を見ていた人が多くいました。

通年のプログラム以外でも、ボランティア・スタッフは活躍しています。

「美術館でクリスマス」は毎年12月中旬の土日を中心に開催されるクリスマスのプログラムです。ボランティア・スタッフが担当するギャラリートークとワークショップ「ボランティアアート」のほかに、クリスマスにちなんだ曲の演奏とアカペラの「クリスマスキャロル・コンサート」が行われます。

その他のプログラム



・ギャラリートーク

常設展の中からクリスマスに関連する作品を数点取り上げ、ボランティア・スタッフが約30分間トークを行います。トークをする作品や内容は全てボランティア・スタッフ自身が考えます。

2016年度

実施日程…12月17日(土)、18日(日)
実施時間…12:00～12:30、13:00～13:30、14:00～14:30
実施回数…6回
参加者数…156名



2017年度

実施日程…12月12日(火)、13日(水)、14日(木)、15日(金)、16日(土)、17日(日)
実施時間…12:00～12:30(16日、17日のみ)、
13:00～13:30、14:00～14:30
実施回数…14回
参加者数…310名



2018年度

実施日程…12月15日(土)、16日(日)
実施時間…12:00～12:30、13:00～13:30、14:00～14:30
実施回数…6回
参加者数…163名



2019年度

実施日程…12月14日(土)、15日(日)
実施時間…12:00～12:30、13:00～13:30、14:00～14:30
実施回数…6回
参加者数…138名



★ボランティア・スタッフの声

クリスマスにキリストは生まれたのでしょうか?「キリスト降誕」など、見る人を絵の中に引き込むポイントを抑えながら「磔刑」など殉教者の物語のほか、東方教会の「イコン」の描かれ方の違いなど宗教画の全体像が浮かび上がる構成を考えて図書館通いをしていました。また、ミレーの作品などにも目を向けて、参加者の真剣な眼差しと笑顔に会えたときは大きな喜びとなりました。(O.M.)

通常の美術トークよりも20分短いため、移動時間を考慮した作品選択の効果が実感できます。事前の準備段階では、通常時同様に、解説する内容を必要最低限に厳選することに苦労しました。それでも参加者からの質問が、丁度、涙を飲んで原稿から省いた箇所だった時は、個人的に気になって調べておいた資料が役に立ちました。その嬉しかった経験は、その後の活動の励みにもなりました。(Y.Y.)

※ボランティア・スタッフによるワークショップはp.70「ボランティアアート」でご紹介します。

研修

ボランティア・スタッフに対して行う研修は2種類あります。1つは新たに活動を始めるメンバーに対して行う「養成研修」、もう1つは、すでに活動しているボランティア・スタッフ向けの「公式研修」です。養成研修は、当館の所蔵作品や建物に関することなどボランティア活動に必要な知識を身に付けるために行います。公式研修は、養成研修で得た知識をさらに深めるため、毎回異なるテーマの講義や創作、他館見学などを教育普及室が企画しています。活動のためのスキルを向上させると同時に、教育普及活動の目的を共有する機会にもなっています。



2016年度 四期ボランティア・スタッフ養成研修

2016年度には四期ボランティア・スタッフの募集を行い、新たに40名が採用されました。約10ヶ月間の養成研修を受け、2017年度からボランティア・スタッフとして活動を開始しました。

■ 四期スタッフの募集から活動開始まで

募集内容

A | スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム

B | 美術トーク

C | 建築ツアー

活動期間 | 2017年4月～2024年3月(長期休館を除く6年間)

募集期間

2016年3月18日～4月18日

選考・採用

書類選考と面接によってボランティア候補生を選出。

A | 19名

B | 10名

C | 11名

研修期間

2016年6月～2017年3月

※上記採用者のうち、2017年4月に担当A:18名、担当B:10名、担当C:10名をボランティア・スタッフとして登録。



■ 四期ボランティア・スタッフ養成研修内容一覧

当館の所蔵作品や建築に関する講義に加え、作品を見ることについて掘り下げるワークショップが行われました。2016年7月には、当館を含む「ル・コルビュジェの建築作品ー近代建築運動への顕著な貢献ー」が世界遺産一覧表に記載されたため、世界遺産に関する講義も組み込まれました。

A: スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム B: 美術トーク C: 建築ツアー

| 日程 | 担当/講師 (講師の役職名等は2016年度当時のもの) | 内容 | 対象 |
|-----------------------|--------------------------------|-----------------------------|-----|
| 1 2016年 6月7日(火) | 古田 由布子 (総務課係員) | 事務手続き | ABC |
| | 寺島 洋子 (主任研究員) | 教育普及室からの挨拶 | |
| | — | 自己紹介 | |
| 2 6月21日(火) | 山下 和茂 (副館長) | 講義「国立西洋美術館の役割」 | AB |
| | 村上 博哉 (副館長・学芸課長) | 講義「国立西洋美術館の所蔵作品について」 | |
| 3 6月28日(火) | 福田 京 (専門職員) | 講義「世界遺産について」 | C |
| 4 7月5日(火) | 山名 善之 (東京理科大学教授) | 講義「ル・コルビュジェの建築について」 | AB |
| | 袴田 紘代 (研究員) | 講義「所蔵作品解説①」 | |
| 5 7月12日(火) | 新藤 淳 (研究員) | 講義「所蔵作品解説②」 | C |
| | 米山 勇 (東京都江戸東京博物館学芸員) | 講義「国立西洋美術館の建築について」 | |
| 6 7月19日(火) | — | 近現代建築資料館見学 | AB |
| | 川瀬 佑介 (研究員) | 講義「所蔵作品解説③」 | |
| 7 8月9日(火) | 邊牟木 尚美 (特定研究員) | 講義「美術品の保存・修復について」 | C |
| | 福田 京 | 講義「建築ツアーで話す内容」 | |
| 8 8月23日(火) | 寺島 洋子、杉浦 央子 (研究補佐員) | 建築ツアー体験 | A |
| | — | 大人向けトークに関する説明、建築ツアーの準備・手順説明 | |
| | 寺島 洋子 | ファミリープログラム「どようびじゅつ」概要説明 | |
| — | 杉浦 央子 | 「どようびじゅつ」秋期サポートの説明 | ABC |
| | 寺島 洋子 | 講義「国立西洋美術館の教育普及活動について①」 | |

| 日程 | 担当 / 講師 (講師の役職名等は2016年度当時のもの) | 内容 | 対象 |
|------------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|----------|
| 9 9月~3月 (12回実施) | 寺島 洋子、横山 佐紀、杉浦 央子、 ボランティア・スタッフ | 建築ツアーのアシスト | C |
| 10 10月~11月 (5日実施) | 寺島 洋子、横山 佐紀、杉浦 央子 | 模擬建築ツアー | C |
| 11 9月~11月 (11回実施) | 寺島 洋子、横山 佐紀、杉浦 央子、ボラ ンティア・スタッフ | 「どようびじゅつ」サポート | A |
| 12 9月6日(火) | 寺島 洋子 | 作品鑑賞(対話型)・ディスカッション | A |
| | 杉浦 央子 | 大人向けトークに関する説明・美術トーク概要説明 | B |
| 13 9月20日(火) | 渡辺 晋輔 (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説④」 | AB |
| | 陳岡 めぐみ (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説⑤」 | |
| 14 10月4日(火) | 中田 明日佳 (研究員) | 講義「所蔵作品解説⑥」 | AB |
| | 飯塚 隆 (研究員) | 講義「所蔵作品解説⑦」 | |
| 15 10月18日(火) | 川口 雅子 (主任研究員) | 講義「研究資料センターの使い方」 | ABC |
| | 横山 佐紀 (主任研究員) | 講義「国立西洋美術館の教育普及活動について②」 | |
| 16 10月25日(火) | 大野 照文 (三重県立総合博物館館長) | ワークショップ「見る、考える」 | ABC |
| 17 11月8日(火) | 岡田 京子 (文部科学省教科調査官) | 講義「学習指導要領について」 | A |
| | 寺島 洋子 | スクール・ギャラリートークの概要と準備説明 | |
| 18 11月~12月 (6日実施) | 寺島 洋子、横山 佐紀、杉浦 央子 | 模擬美術トーク | B |
| 19 12月~ 2017年1月 (5日実施) | 寺島 洋子、横山 佐紀、杉浦 央子 | 模擬スクール・ギャラリートーク | A |
| 20 3月25日(土) | 杉浦 央子 | スクール・ギャラリートークの手順説明 | A |
| | 馬淵 明子 (館長) | 美術トークの手順説明 講義「『北斎とジャポニスム』展について」 | B ABC |

2019年度には五期ボランティア・スタッフの募集を行い、新たに23名が採用されました。約9ヶ月間の養成研修を受け、2020年度にボランティア・スタッフとして登録されました。

■五期スタッフの募集から活動開始まで



A | スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム

B | 美術トーク

C | 建築ツアー

活動期間 | 2020年4月~2027年3月(長期休館を除く6年間)



2019年3月11日~4月12日



書類選考と面接によってボランティア候補生を選出。

A | 11名

B | 5名

C | 7名



2019年6月~2020年2月

※新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため
2020年2月25日~3月31日研修を中止

※上記採用者のうち、2020年4月に全員をボランティア・スタッフとして登録。



■五期ボランティア・スタッフ養成研修内容一覧

当館の所蔵作品、建築に関する講義、実際に作品をよく見ることを体験したりトークプランを作成するワークショップ、活動するプログラムに関するディスカッションなどが実施されました。また、作品をよく見て描かれているものを言葉で表す（ディスクリプション）課題にも取り組みました。

※3月「建築ツアー見学」(4回予定)は新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため2020年2月25日～3月31日実施中止

A: スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム B: 美術トーク C: 建築ツアー

| 日程 | 担当/講師 (講師の役職名等は2019年度当時のもの) | 内容 | 対象 |
|-----------------------|---|----------------------------------|-----|
| 1 2019年 6月4日(火) | 渡辺 周吾 (総務課係長) | 事務手続き | ABC |
| | 酒井 敦子 (研究員) | 教育普及室からの挨拶 | |
| | 松尾 由子 (特定研究員) | ボランティア研修の概要 | |
| | 馬淵 明子 (館長) | 講義「国立西洋美術館の設立の経緯について」 | |
| 2 6月18日(火) | — | 自己紹介 | ABC |
| | 松尾 由子、寺島 洋子 (元国立西洋美術館研究員) | 講義「国立西洋美術館の教育普及活動(ボランティア関連)について」 | |
| | 酒井 敦子 | 講義「国立西洋美術館の教育普及活動(企画展関連)」 | |
| 3 6月25日(火) | 大木 章子 (研究補佐員) | アートカードを使用したゲーム | AB |
| | 渡辺 晋輔 (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説①」 | |
| 4 7月2日(火) | 酒井 敦子 | 美術トーク(大人向け)の概要、課題(7～9月中の見学)について | B |
| | 川瀬 佑介 (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説②」 | AB |
| 5 7月9日(火) | 寺島 洋子 | 講義「国立西洋美術館本館について」 | C |
| | 福田 京 (専門職員) | 講義「国立西洋美術館の増改築について」 | AB |
| 6 7月23日(火) | 飯塚 隆 (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説③」 | AB |
| | 新藤 淳 (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説④」 | |
| 7 7月～9月 | — | 美術トーク見学 | B |
| 8 8月6日(火) | 松隈 洋 (京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授) | 講義「近代建築とル・コルビュジェについて」 | C |
| | 西 和彦(国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター国際情報研究室長) | 講義「世界遺産について」 | |
| 9 8月27日(火) | 陳岡 めぐみ (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説⑤」 | AB |
| | 袴田 紘代 (主任研究員) | 講義「所蔵作品解説⑥」 | |

| 日程 | 担当/講師 (講師の役職名等は2019年度当時のもの) | 内容 | 対象 |
|-----------------------------|--------------------------------|---|-----|
| 10 9月3日(火) | 寺島 洋子 | 建築ツアー体験 | C |
| | 寺島 洋子、酒井 敦子、松尾 由子、大木 章子 | ディスカッション「体感するツアーとは」 | |
| | 大木 章子 | 模擬建築ツアー、1月研修日補足、見学について | |
| 11 9月10日(火) | 村上 博哉 (副館長・学芸課長) | 講義「所蔵作品解説⑦」 | AB |
| | 久保田 有寿 (特定研究員) | 講義「所蔵作品解説⑧」 | |
| 12 10月1日(火) | 川口 雅子 (主任研究員) | 講義「研究資料センターの使い方」 | ABC |
| | 田島 伸彦 (株式会社 協栄) | 講義「展示室でのお客様対応」 | |
| | 酒井 敦子 | ディスカッション「美術トークを見学して」 | |
| | 大木 章子 | 模擬美術トークに向けて | |
| 13 10月8日(火) | 寺島 洋子 | ワークショップ「見る(観る)こと(ヴィジュアル・リテラシー)について」 | AB |
| | 松尾 由子 | ファミリープログラム「どようびじゅつ」の概要説明、見学について | A |
| 14 10月(3日実施) | 寺島 洋子、酒井 敦子、松尾 由子、大木 章子 | 模擬建築ツアー | C |
| 15 10月29日(火) | 松尾 由子 | 「どようびじゅつ」体験、体験後の振り返り | A |
| 16 10月～11月 (6回実施) | — | 「どようびじゅつ」見学 | A |
| 17 11月12日(火) | 寺島 洋子 | 対話による鑑賞体験 | A |
| | 酒井 敦子 | 講義「スクール・ギャラリートークについて(学習指導要領、トークプラン)」 | |
| 18 11月19日(火) | 寺島 洋子 | スクール・ギャラリートーク体験、鑑賞分析 | A |
| 19 11月26日(火) | 松尾 由子 | ワークショップ「作品のディスクリプション、トークプランをつくる」 | A |
| | 大木 章子 | 模擬スクール・ギャラリートーク、トークのサポートについて | |
| 20 11月28日(木) 12月3日(火) | 寺島 洋子、酒井 敦子、松尾 由子、大木 章子 | 模擬美術トーク | B |
| 21 12月～2020年 1月(8回実施) | — | スクール・ギャラリートークのサポート | A |
| 22 1月(3日実施) | 寺島 洋子、酒井 敦子、松尾 由子、大木 章子 | 模擬スクール・ギャラリートーク | A |
| 23 1月14日(火) | 酒井 敦子、松尾 由子、大木 章子 | 模擬美術トークの振り返り、美術トークの流れについて | B |
| 24 1月21日(火) | 福田 京 | 館内見学(建築) | C |
| | 酒井 敦子、松尾 由子、大木 章子 | 模擬建築ツアーの振り返り、建築ツアーの流れ、2～3月のツアー見学について | |
| 25 2月4日(火) | 酒井 敦子、松尾 由子、大木 章子 | 模擬スクール・ギャラリートークの振り返り、スクール・ギャラリートークの流れについて | A |
| 26 2月(3回実施) | — | 建築ツアー見学 | C |

2016年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|----------|------|--------------------|
| 5月28日(土) | 福田 京 | 講義「国立西洋美術館の建築に関して」 |

2017年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|-----------|------------------------------------|---------------------------------|
| 10月11日(水) | 寺島 洋子、酒井 敦子、杉浦 央子 | 「スクール・ギャラリートークの目的」 |
| 11月11日(土) | 柳沼 茂 (国土交通省大臣官房官庁営繕部設備・環境課統括工事検査官) | 講義「国立西洋美術館の免震構造について」 |
| 11月11日(土) | 寺島 洋子、酒井 敦子、杉浦 央子 | 「美術トーク基本方針の再確認」 |
| 2月6日(火) | 寺島 洋子、酒井 敦子、杉浦 央子 | 「スクール・ギャラリートークについて(知識と思考のバランス)」 |

2018年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|------------------------|-------------|---|
| 7月22日(日) 7月29日(日) | 寺島 洋子 | 「子ども向け建築ツアーについて」 |
| 8月5日(日) 8月12日(日) | 寺島 洋子、松尾 由子 | 模擬子ども向け建築ツアー |
| 10月13日(土) 10月17日(水) | 寺島 洋子 | 子ども向け建築ツアー体験 |
| 2月20日(水) 2月27日(水) | 寺島 洋子、福田 京 | 旧館長室下見(「ル・コルビュジェ 絵画から建築へーピュリスムの時代」展での特別建築ツアーに向けて) |
| 2月27日(水) | 村上 博哉 | 「ル・コルビュジェ 絵画から建築へーピュリスムの時代」展ギャラリートーク |
| 3月21日(木) | 村上 博哉 | 講義「ル・コルビュジェ」 |

2019年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|-----------|-------------|-----------------------------------|
| 10月30日(水) | 寺島 洋子、松尾 由子 | 「子ども向け建築ツアー研修(模擬ツアー・ディスカッション・講義)」 |

※講師の役職名等は研修当時のもの

美術館主催の教育普及プログラムのほかに、ボランティア・スタッフが自ら企画・実施する自主的な活動です。担当別に学びたいことを話し合っって企画する「自主研修」、活動に必要な資料の蔵書を管理する「図書委員」、参考資料をデータ化する「PDF委員」、ボランティア・スタッフが企画から実施まですべてを行う「ボランティアアート」があります。

自主的な活動



■ 自主研修

A: スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム B: 美術トーク C: 建築ツアー

2016年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|----------|---------------------------------------|--|
| 9月4日(日) | — | 担当C自主研修「建築ツアーボランティア候補生との顔合わせ・実施内容の説明会」 |
| 9月10日(土) | 紀井 利臣 (跡見学園女子大学准教授) 水戸 茂雄 (リュート奏者) | 担当B自主研修「リュートの時代」 |

2017年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|-----------|------------------------|--|
| 7月31日(月) | — | 担当A自主研修「スクール・ギャラリートークに関する意見交換会」 |
| 8月5日(土) | — | 担当A自主研修「スクール・ギャラリートークに関する意見交換会」 |
| 9月22日(金) | 藤村 拓哉 (町田市立国際版画美術館学芸員) | 担当A自主研修「町田市立国際版画美術館見学及び学芸員によるギャラリートーク」 |
| 11月11日(土) | — | 担当B自主研修「美術トークについて」 |

2018年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|-----------------|---------------|--|
| 8月~3月 (6回実施) | — | 担当A自主研修「VTS (Visual Thinking Strategies) を話し合う会」 |
| 8月31日(金) | — | 担当A自主研修 横浜美術館「モネ それからの100年」展観覧 |
| 1月12日(土) | 寺島 洋子 (主任研究員) | 担当B自主研修「美術トーク体験・分析」 |

2019年度

| 日程 | 講師 | 内容 |
|---------|----|--|
| 9月9日(月) | — | 担当A自主研修「東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館(現館名:SOMPO美術館)とのボランティア交流会」 |

※講師の役職名等は研修当時のもの

※上記以外にも交流会や勉強会として自主的な活動を行っている

■ 図書委員

ボランティア・スタッフが活動のために利用するボランティア室には、現在約780冊の本があります。新規図書の登録分類や蔵書リストの作成、貸出、寄贈の受入、棚卸しなどの蔵書管理は、2011年から有志メンバーによって自発的に発足した図書委員によって行われています。過去に当館で行われた展覧会のカタログや美術史、建築、教育普及に関する書籍などが集められており、ボランティア・スタッフからのリクエストを受けて教育普及室で書籍を購入することもあります。



■ PDF 委員

ボランティア室の資料のうち、当館で所蔵する作品や作家、建築などに関する資料の一部はPDFデータ化もしています。2012年度に有志のメンバーによって始まったPDF委員は、活動に役立ちそうな資料を選び、PDF資料にして閲覧できるようにしました。プリントアウトしたPDF資料は作家ごとにファイリングして、管理しています。

2019年度にボランティア・スタッフへ行った利用状況のアンケート結果から、ボランティア・スタッフそれぞれが独自のスタイルで資料を準備していることが分かり、また、PDF委員の多くが活動の任期を迎えるため、新規の資料更新は行わないことになりました。2019年度をもってPDF委員は解散しましたが、資料は引き続き利用することができます。

■ ボランティアアート



担当A・B・Cの区別なく企画から実施までの全てを有志のボランティア・スタッフが行うプログラムです。誰でも自由に参加できる申込不要の立ち寄り制で、夏休みと「美術館でクリスマス」に合わせて年に2回実施しています。

「ボランティアアート」とは“Volunteer”と“Art”を合わせた造語。このネーミングもボランティア・スタッフから募集して決めたものです。広報のためのチラシやポスターではこのロゴマークが目印になっています。

・ 2016年度

あおげば涼し、アートでうちわ！

実施日程…8月6日(土)、7日(日)、27日(土)、28日(日)
 実施時間…①11:00～13:00 ②14:00～16:00
 参加者数…719名(子ども:301名、大人:418名)

作って飾ろうクリスマス キラキラツリー★アートツリー

※「美術館でクリスマス」のプログラムとして実施
 実施日程…12月17日(土)、18日(日)
 実施時間…10:00～15:00
 参加者数…291名(子ども:78名、大人:213名)



・ 2017年度

アートでうちわ！2017

実施日程…8月19日(土)、20日(日)
 実施時間…10:00～16:00
 参加者数…594名(子ども:216名、大人:378名)



・ 2017年度

作って飾ろうクリスマス とびだすカード★キラキラリース

※「美術館でクリスマス」のプログラムとして実施
 実施日程…12月16日(土)、17日(日)
 実施時間…10:00～16:00
 参加者数…475名(子ども:88名、大人:387名)



・ 2018年度

アートでうちわ きんぎょでユラユラ・パンダでくるくる！！

実施日程…8月25日(土)、26日(日)
 実施時間…10:00～16:00
 参加者数…518名(子ども:179名、大人:339名)



作って飾ろうクリスマス とんがりツリー★おり紙オーナメント

※「美術館でクリスマス」のプログラムとして実施
 実施日程…12月15日(土)、16日(日)
 実施時間…10:00～16:00
 参加者数…369名(子ども:110名、大人:259名)



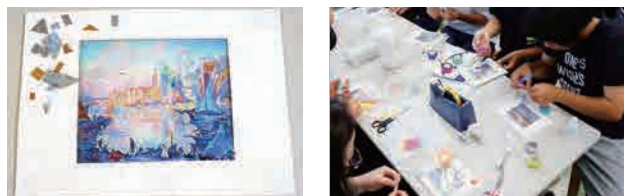
・2019年度

つくろうフォトフレーム きこう波のささめき !!

実施日程…8月17(土)、18日(日)

実施時間…10:00 ~ 16:00

参加者数…357名(子ども:199名、大人:158名)



ユルユル・キラキラ !! 星のツリー

※「美術館でクリスマス」のプログラムとして実施

実施日程…12月14日(土)、15日(日)

実施時間…10:00 ~ 16:00

参加者数…360名(子ども:60名、大人:300名)



★ボランティア・スタッフの声

ボランティア活動に参加し驚いたことは、企画立案や材料調達のみならず会計、作業室レイアウトなど細部に至るまでの作業をボランティアが任されていた事です。ベテランボランティアの皆さんの経験値と教育普及室のアドバイスに助けられ、私も活動への熱意が高まりました。当日の来館者皆様の笑顔は今も私の宝物です。(O.A.)

笑顔のお客さま、お客さまの美意識、ボランティア冥利につきる瞬間です。常連の方で「今年は連れが臥しているの、作ってお見舞いに行くの」と心温まるドラマもありました。何を作るかアイデアに迷う楽しい時間、プレゼンテーション、材料等の買出し、毎週の準備作業、そして当日の充実感は忘れることができません。(O.T.)

実施までの流れ

1 初回打ち合わせ

教育普及室が初回打ち合わせの日を設定し、ボランティア・スタッフへ連絡します。初回打ち合わせは、プログラムを行う約4ヶ月前に行い、初回のみ教育普及室が同席し、実施日程や場所などの基本情報を伝えます。



2 内容の検討・企画書提出

初回打ち合わせに出席したボランティア・スタッフが企画担当者となり、プログラム内容を検討します。内容が決まったら実施の約2ヶ月前までに「企画書」を教育普及室へ提出。教育普及室が内容を確認し、実施が確定します。



3 準備・シフト作成

企画担当者は参加者が使う材料や道具を用意します。さらに、ボランティア・スタッフ全員に呼びかけて、当日のお手伝いとして参加するボランティア・スタッフを募ります。



4 告知・トライアル

プログラム実施の約1ヶ月前に、教育普及室がチラシやホームページなどでプログラムの告知をします。また、企画担当者は、当日参加するボランティア・スタッフにプログラム内容を説明する「トライアル」を行います。



5 監視スタッフとの打ち合わせ

実施日の約1週間前に、当日の流れなどを共有するため、企画担当者、監視スタッフ、教育普及室スタッフが集まり、打ち合わせをします。



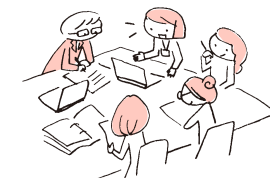
6 当日

案内担当、作業の説明担当など、あらかじめ決めた役割分担のもと、プログラムを行います。



7 ふりかえり・結果報告

プログラムが終わったら、振り返りを行います。参加者への声のかけ方や混雑時の案内、材料の量などについて話し合い、よりよい方法を検討します。全日程が終了したら、ボランティア・スタッフ全員に結果報告をします。参加人数や当日の様子などをまとめ、皆で共有します。



夜間開館時（金曜日）に常設展で不定期に開催しているトークです。美術トークを担当するボランティア・スタッフからの提案により、2016年度に始まりました。開催日や時間、トークの担当者数など、実施方法をボランティア・スタッフ同士で何度も話し合い、トライアルを重ね、開催に至りました。

1回のトークでは常設展示室の作品3点を取り上げ、1点につき10分ずつトークを行います。当初は1人1点ずつ、3名のリレー形式で行っていましたが、2019年度からは1人1点と決めず、1～3人で実施しています。

美術トークとは異なる時間帯に設定したため、仕事帰りと思いき方々の参加も見られます。



2016年度

実施日程…5月20日、6月10日、10月28日、
11月18日、1月13日、3月17日*
実施回数…6回
参加者数…カウントなし

2017年度

実施日程…4月14日、5月19日、6月23日、
7月28日、8月25日、9月22日、10月27日、
11月24日、1月26日、3月16日*
実施回数…10回
参加者数…278名

2018年度

実施日程…4月27日、5月18日、6月22日、
7月13日、8月24日、9月7日、10月19日、
11月23日、12月7日、3月1日[2回]、3月8日*
実施回数…12回
参加者数…283名

2019年度

実施日程…5月17日、6月21日、7月12日、
9月20日、10月11日、11月22日、12月6日、
1月17日、2月21日*
実施回数…9回
参加者数…224名

*実施時間はいずれも、18:30～19:00

※新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡大防止のため2020年2月25日～3月31日全プログラム中止

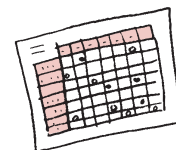
★ボランティア・スタッフの声

「海外の美術館のように、夜間にもイベントがあればいいのにね。」始まりは仲間のそんな一言だったと思います。仲間と何度もトライアルを重ねて作り上げ、実現させた自主企画。思い入れや思い出がたくさんあるだけに、今も引き継がれ、運営されていることが嬉しいです。夜の静かな美術館では、作品も昼間とは違った表情を見せます。そんな魅力を来館者が知るきっかけになればと思います。(I.S.)

2018年度の金曜ナイトトークは12回実施し、毎回おおよそ20名以上のお客様に参加いただきました。お客様のなかには勤め帰りの方など昼間の美術トークとは違った方も多く、比較的熱心に聞いて下さり、終了後に感謝のお言葉を頂戴することも多かったです。ナイト係としてはトーク担当者を集めるのに苦労しましたが、お客様のニーズと感謝の言葉に支えられて継続的に実施することができました。(T.S.)

1 トーク日程・シフト作成

連絡窓口となったボランティア・スタッフ（以下「ナイト係」という）が教育普及室と相談し、トーク日程を決めます。ナイト係は美術トーク担当のボランティア・スタッフからトーク希望者を募り、シフト表を作ります。1回のトークにつき担当するのは1～3名、担当者が複数の場合は当日のリーダーを決めます。



2 トーク準備

担当が決まったら、その日に向けて準備開始。



3 館内に告知

当日の担当者（複数の場合は当日のリーダー）が取り上げる作品をナイト係と教育普及室に連絡します。担当者は作品リストを作成し、当日、館内に掲示します。



4 最終確認

当日はボランティア室で簡単な打ち合わせ（担当者が複数の場合）を行います。作品の位置や動線の確認など、最後の準備をします。



5 作品前で待機

トークが始まる少し前に、展示室内の作品前で待機します。



6 トーク開始

時間になったら、トークを開始します。所要時間は約30分。1作品10分、計3作品を参加者と鑑賞していきます。担当者が複数の場合、自分のトーク以外の時間はサポート役にまわります。



7 ふりかえり・報告メール

トーク終了後、それぞれのトークや当日の参加者の様子を振り返り、次のトークに活かします。担当者はナイト係と教育普及室に報告メールを送ります。



ボランティア・スタッフ卒業生の声

2019年度までに、一期(2004～2017年度)、二期(2008～2018年度)、三期(2013～2019年度)のボランティア・スタッフが任期を終えて卒業しました。ボランティア活動を振り返り、印象に残っている出来事や感想、西洋美術館(以下「西美」という)での活動が現在活かされていることなど、自由に答えていただきました。

「西美での活動はご自身にとってどのようなものでしたか？」

(2020年10月に質問)

(A: スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム B: 美術トーク C: 建築ツアー)

一期ボランティア・スタッフ

里広江 A担当

当初、西美でのスクール・ギャラリートークが初めて、もしくは希少な美術館体験、と言う児童生徒がほとんどだったのが印象的で、私たちの活動が美術館と子どもたちを繋ぐ役割を果たしていることに意義を感じました。ファミリープログラムでは、美術への関心が高い家族と美術館との関係をより一層深めるお手伝いが出来たのではと自負しております。個人的には刺激と学びに満ちた貴重な機会でした。

白田 詠子 A担当

トーク時には「5年後、10年後に西美に来てこの作品を見たら、全く違って見えるかもしれないよ。」と子どもたちへ言っていました。2020年の夏に久しぶりにヤコブ・デル・セッラオの《奉納祭壇画: 聖三位一体、聖母マリア、聖ヨハネと寄進者》を見たら、しみじみ全く違って見えるという体験を自分がしました。子どもたちが今後体験する未来で、西美と一緒に作品を見たことが少しでも支えになればいいなと思いました。

磯田 暉子 A・B担当

西美のボランティアで深く心に刻まれているのはスクール・ギャラリートークの子どもたちの言葉や表情です。現在は地域の歴史や文化を伝えるボランティアガイドとして江戸時代の絵図や古い写真を片手にまち歩き案内をしています。中でもうれしいお客さまは区内小学校の社会科見学の子どもたち。テーマは地域の「昔と今」。絵図と比べて様々な言葉が出てきます。西美のスクール・ギャラリートークを思い出す瞬間です。

井上 直子 A・B担当

1冊の本にも価する西洋絵画を読み解く楽しさ、色や構図の美しさ、時を経ても色あせない作者の作品に対する情熱。どれも私の西美でのボランティア活動の基盤になっていました。作品を通しての所蔵品ガイドや子どもたちとの活動は、私にとって貴重な体験となりました。気が付けば、あらゆる分野のアートとの垣根を取り去り、自由な一人の「鑑賞者」へと成長させてくれました。

鈴木 由紀 A・B担当

14年間の活動を振り返れば、スクール・ギャラリートークを印象深く思います。「目で、考える。こころで、話す。」を目標に、失敗も多々ありましたが子どもたちとの対話に心を砕きました。観察して考えを言葉にし、他者の意見をきちんと聞くことは年齢や立場を問わず大切なことです。一緒に作品を鑑賞した子どもたちはもとより、私にとっても貴重な経験となりました。楽しい日々でした。

三好 美智子 A・B担当

私の楽しみの一つは美術館や博物館に行き、芸術作品を楽しむことです。西洋美術館でのボランティア活動を通して絵画や彫刻の楽しみ方を培ってきたように思います。子どもたちとの会話や来館者との美術談義は今でも楽しい思い出です。そして活動を通して得た様々な経験や知識は私のかけがえのない財産となっています。今度はこの展覧会に行こうかなと思いつつ今です。

二期ボランティア・スタッフ

澤野 曠一 A担当

サラリーマン卒業後、経済社会とは疎遠になりましたが、ボランティア活動を通じ、美術館と来館者、及び、活動仲間という新たな社会との繋がりを得て、張りのある生活ができたことを感謝しています。そして、疾の昔に忘れてしまった“無垢な心で対象を見る”という「子どもの眼」を再体験できたことは大変貴重で、それは今、高齢化社会を乗り切っていく上で必要な活力の素になっています。

福良 恵子 A担当

スクール・ギャラリートークで幼稚園児から専門学校生と作品を共に観賞したことは、私にとって代え難い体験となりました。新型コロナ発生以前でしたので、自然な行動や会話で交流できたのは本当に幸せなことでした。「この建物や今日一緒に見た作品はずっとここにあるのでまた会いに来てね。」スクール・ギャラリートークで別れ際によく口にしていたのですが、今や西美は私にとってこそ唯一無二の存在、折に触れ訪れたい場所となっています。

新井 智子 A・B担当

休館前の常設展、壁から子どもたちの声が聴こえて、改めて私の人生に大切な場所だったと痛感しました。ボランティア活動で出会う子どもたち、大人の皆さまに伝えるため学び得たすべては今私と共にあります。活動を共にした方々からは、多くの知識を頂きました。ひたすら充実と喜びに満ちていた西美での活動。「できる限りの情熱」が、関わった皆様のココロのどこかに伝わっていただくと願っています。

橋本 典子 A・B担当

ボランティアをした10年は、西洋美術館に行くことが日常的になっていました。ボランティア活動では様々な出会いがあり、美術トーク、スクール・ギャラリートークでの思いがけない発見、ボランティアのみなさんとトークや作品について話す楽しみがありました。常設展の作家たちに親しみを感じ、海外からの展覧会で常設作家たちの異なる作品にも出会えました。私にとって大事な10年でした。

畑中 たまき B担当

人と人との出会いは一期一会。自慢げに、時に恥ずかしそうに自分の作品を見せてくれる子どもたち、目を輝かせながら作品に入ってお客様・・・、西洋美術館の活動は、作品と人との出会いを演出していると思いました。そしてお客様、ボランティア・スタッフの双方に、毎回新たな発見と変化をもたらしてくれる、かけがえない活動だと実感しました。あの経験と出会いは今でも私の宝物です。

浜田 明美 B担当

先日久しぶりに常設展を訪れたのですが、自分が何度も解説した作品を目にした瞬間、古い友人に再会したような懐かしい思いで胸がいっぱいになりました。ここでの10年間は、私にとって何ものにも代え難い貴重な経験だったのだなぁと改めて感じ、誇らしい気持ちも湧いてきました。任期終了後は、西美での経験を生かし、生涯学習の一環として美術の講座を地元で時々やらせていただいています。

文屋 信男 B担当

現在、望み得る最高の環境（作品・建物・お客様）で、「西洋美術のトーク」を10年超、継続出来た事に対し、感謝の気持ち一杯です。「松方コレクション」の有難みは勿論、開館以来60年に亘る地道な収集の結果、西洋美術史に沿ったトークが可能になり、企画展を意識した作品選びをする事が出来たが、今後、「現代美術館」を除いて、この様な『西洋美術館』の設立は不可能と確信しています。

山本 三津江 B担当

西美での10年間のボランティア活動は、私にとって掛け替えのない宝物です。美術には個人的に関心を持っていましたが、専門外の私がこのような貴重な作品に関わることができるとは夢にも思っていませんでした。学ぶべきことの多さに圧倒されることはありませんでした。この間の活動が自分を豊かにし、ひいてはどなたかのお役に立てれば幸いです。

稲森 珠実 A担当

美術館で初対面のスタッフと一緒に「美術作品と対話する」子どもたちは、戸惑いながらも率直な気持ちを口にしてくれます。私は子どもたちと一緒に考えることで、自分自身の心や見方が広げられるように感じました。子どもたちの感性との共鳴が難しかった日には、結果を心配する事もありましたが、子どもたちと対話できる日は、毎回楽しみな大変豊かな時間だったと懐かしく思い返します。

鈴村 伊知子 A担当

活動を始めてから、訪れる子どもたちのワクワク感や好奇心に寄り添えるよう、自分自身が好みに片寄らずあらゆるジャンルの展覧会へ出かけるようになりました。他館のスタッフの対応の様子や施設の機能などにも興味を持つようになりました。活動を通して、物事をフラットな視点で楽しむ術を教わり、世界が少し広がった気がします。出会えた皆さまに感謝です。

西田 通子 A担当

それはまさに『ベル・エポック』。沢山の子どもたち、来館者の方々とご一緒した対話型鑑賞、またイベントは私にとって大切な学びの時間でした。ボランティア仲間にも恵まれ、楽しくイベント準備に動んだことは忘れられません。教育普及室の皆さまには常に温かいご指導とサポートを、研究員の方々には大変貴重なご講義を頂きました。活動を通して出会った全ての方々から感謝申し上げます。

村上 恵子 A担当(2013～2016年度)・B担当(2017～2019年度)

ボランティア活動の6年間。やんちゃな子どもたちからは叱咤激励と新鮮な感動を。大人の方には作品を介して共感する喜びを。嬉しい出会いをたくさん頂きました。とくに印象に残ったのは、幼い姉妹を連れて若いご夫婦がトーク後、質問にいらして「海外旅行が好きで美術館にもよく行くのですが、見方がわからなくて。何かアドバイスを。」と。美術館へ行くことって、もう日常のことなんですね。

岡田 正宇 C担当(2013～2016年度)・B担当(2017～2019年度)

建築から美術へ。当初は気負いから内容を盛りすぎて・・・、しかし次第にテーマを設けて全体の流れをつくり、易しい言葉で作品をよく見ていただくようにして、多くの笑顔に会えた時は「良かった！」という気持ちで一杯でした。また、ボランティアのお客様と制作の楽しみを共有し、教育普及室からの温かい励ましも受けて、作品を通してお客様と一緒に会話を楽しむ自分になれた気がします。

大堀 隆嗣 C担当

数々のル・コルビュジェの言葉から、「形、空間、光からの感動があって建物は建築になる」という考えが読み取れます。他の美術館に出かけたり、古い日本建築や神社仏閣を訪れるたびに、このことを思い出すようになり、また建築ガイドを経験したことにより、古来の日本建築の琴線にさらに深く触れることができるようにもなりました。西美のボランティア活動に感謝です。

和田 昭子 C担当

西洋美術館でのボランティア活動を通して、美術館がとても身近な存在となりました。以前も特別展など美術館を訪れることはありましたが、鑑賞の仕方が変わったように感じています。美術作品をその展示空間まで含めて鑑賞したり、美術館の建物をじっくり見たりするようになったのは、ボランティアで建築ツアーを担当しながら身に着いたものだと思います。



■ ボランティア・スタッフ名簿

- ・本名簿は、2016～2019年度に活動実績のあったボランティア・スタッフに限り掲載。
- ・担当については、任期終了時、または活動中の場合は2019年度時点の担当を記載。
- ・期間については、ボランティア候補生として養成研修を受けた期間も含む。

A: スクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム B: 美術トーク C: 建築ツアー

| 一期ボランティア・スタッフ (2004～2017年度) | | 二期ボランティア・スタッフ (2008～2018年度) | | 三期ボランティア・スタッフ (2013～2019年度) | |
|--------------------------------|--------|--------------------------------|----------------------|--------------------------------|----------------------|
| 担当 | 名前 | 担当 | 名前 | 担当 | 名前 |
| C | 安藤 まりえ | A・B | 新井 智子 | A | 稲森 珠実 |
| A・B | 石川 佐知子 | C | 小川 滋 | C | 大堀 隆嗣 |
| A・B | 磯田 暉子 | B | 小竿 真紀 | A | 岡田 史穂子 |
| A・B | 井上 直子 | A | 澤野 曠一 | B | 岡田 正宇 |
| A | 里 広江 | A | 谷口 武教 | A | 榊原 たまき |
| A | 白田 詠子 | A | 中野 恵子 | C | 塩田 伸一 2013～2018年度 |
| A・B | 鈴木 由紀 | B | 中村 宏美 | A | 鈴木 伊知子 |
| A・B | 長井 靖子 | A・B | 橋本 典子 | A | 高野 涼子 |
| C | 檜谷 錦子 | B | 畑中 たまき | B | 田上 恵子 |
| A | 平賀 恵美 | B | 浜田 明美 | A | 中尾 小絵 |
| A・B | 三好 美智子 | A | 福良 恵子 | C | 中山 裕子 |
| A・C | 横島 ミサコ | B | 文屋 信男 | A | 西田 通子 |
| | | C | 前田 直哉 | C | 和田 昭子 |
| | | A | 森保 裕恵 2008～2016年度 | | |
| | | B | 山本 三津江 | | |

| 四期ボランティア・スタッフ (2016年度～) | | | | 五期ボランティア候補生 (2019年度～) | |
|----------------------------|----------------------|----|--------|--------------------------|--------|
| 担当 | 名前 | 担当 | 名前 | 担当 | 名前 |
| A | 浅野 尚代 | C | 角川 茂子 | A | 東 悦子 |
| C | 猪飼 藍 | A | 永井 てるみ | B | 阿部 廉 |
| B | 池端 伸浩 | C | 中村 喜光 | C | 五十嵐 美香 |
| B | 宇野 三奈子 | A | 夏目 敬子 | A | 池田 麻美子 |
| A | 大谷 愛子 | A | 西岡 啓太 | A | 石川 佐知子 |
| A | 片岡 礼子 | C | 野口 真知子 | A | 井野口 知子 |
| B | 金子 真紀 | A | 野村 和子 | A | 岩佐 高明 |
| A | 鎌田 千束 | B | 早矢仕 文男 | C | 角谷 敏昭 |
| A | 亀山 麻里 | C | 原 勲 | B | 岸田 裕子 |
| B | 川崎 博康 | A | 福住 久栄 | B | 甲野 正道 |
| B | 北野 純 | B | 淵野 結美子 | C | 小谷 路世 |
| A | 窪田 光江 | A | 牧 幸子 | C | 鈴木 敦子 |
| B | 小林 裕美 | C | 松浦 芳子 | A | 鈴木 由紀子 |
| A | 小森 絵美 | C | 眞野 晃一 | A | 関 恵子 |
| C | 酒井 猛 | A | 向山 裕子 | A | 内藤 知子 |
| A | 島崎 さゆり | B | 山鹿 祐子 | B | 長井 靖子 |
| A | 清水 悦子 | C | 山崎 尚洋 | C | 中村 茂 |
| B | 高田 外次 | A | 吉田 早苗 | B | 中山 莉花 |
| A | 高橋 聖子 2016～2019年度 | C | 吉田 小夜子 | A | 原田 清美 |
| | | | | A | 福泉 裕紀子 |
| | | | | C | 前澤 薫 |
| | | | | A | 向井 由紀 |
| | | | | C | 横島 ミサコ |

■教育普及室スタッフ名簿

| 名前 | 期間 |
|--------|-------------|
| 寺島 洋子 | 1994～2018年度 |
| 横山 佐紀 | 2006～2016年度 |
| 酒井 敦子 | 2017年度～ |
| 前園 茂宏 | 2004～2019年度 |
| 杉浦 央子 | 2013～2017年度 |
| 松尾 由子 | 2018年度～ |
| 大木 章子 | 2019年度～ |
| 長谷川 暢子 | 2020年度～ |

本書の編集作業は、コロナ状況下の2020年6月より始めました。これまではプログラムの準備や立ち合いと並行して作業していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で全プログラムが中止となったことに加え、館内施設整備による休館が重なり、2016年度から2019年度の活動についてじっくり振り返りながら作業を進めることができました。

この1年は一緒に活動してきたボランティア・スタッフと会えない状況が続きました。その間、メールやオンラインツールを使いながら、コミュニケーションを取り、報告書への原稿やコメントを集めました。ボランティア活動やプログラムが行えない中、これまでの活動がボランティア・スタッフをはじめ、私たちスタッフ、そして来館者にとって、いかに意義があることだったか身をもって実感することができました。

このたび本書の編集に携われたことに深く感謝します。本書の活動記録が今後の活動の一助になり、多くの方々はその活動を知っていただく機会となれば幸いです。(大木)

2020年度から当館の教育普及室で働きはじめた私にとって、本書にまとめられた2016～2019年度の活動は、見たことも経験したこともないものばかりでした。編集をとおして、教育普及室のさまざまなプログラムをボランティア・スタッフが支えていることに驚いたのと同時に、報告書に寄せられたボランティア・スタッフのコメントや記録に残された写真から、来館者に美術館を楽しんでもらうことへの喜びとエネルギーを感じ、その場にいなかった私も思わず楽しい気持ちになることができました。

編集を終えた2021年度は、長期休館のため通常のボランティア活動を休止しています。活動再開時には、これまでと変わらず来館者に美術館を楽しんでもらえるように、活動休止を経てさらにパワーアップしたボランティア・スタッフとともにプログラムを実施できることを心から楽しみにしています。

本書の編集に携われたことを感謝するとともに、本書をとおして少しでも多くの方に活動を知っていただく機会となれば嬉しく思います。(長谷川)

編集を終えて

大木 章子・長谷川 暢子

国立西洋美術館
教育普及室

国立西洋美術館

ボランティア活動報告 2016年度－2019年度

発行日：2021年6月30日 © 国立西洋美術館

編集：大木 章子・長谷川 暢子

編集協力：酒井 敦子・松尾 由子

アートディレクション：大岡寛典事務所

デザイン：平松 るい

イラスト(挿絵)：宇田川 一美

イラスト(似顔絵)：武者小路 晶子

制作：国立西洋美術館

東京都台東区上野公園7-7

